口仁9
1045

ロ二9
1545

食禮

三禮口訣

李氏著
書禮
柳枝軒藏版

食禮口訣序

東京

いうまでもなく人は礼に飲食するものである。豈ただ飲食のみならんや。いろいろ
まるといろいろ。豈ただ飲食のみならんや。
ひとかたれば礼なくしてんばかり
するにまかせて禽獸よりなり。
況や節(セツ)かけまいべき方(ヤウ)と表(ヤウ)わ
ひとくさ方とそこの真(マコト)をなるべき。
なほ如上無礼いまだこのごとくばかりで

を古れ礼の三ヶ条ふかく行ひ予も
とりきけり一ぱいの飯食の礼有と
かゝるべきやうべきやうと緊要なると
わけめく。児童ともとさと
さんぬ。食礼は訣一編とつくる
元禄丁卯上巳日

貝原篤信書

食禮口訣

食禮

食盤（ばんしょく）（俗ニ膳と）とは生と義。元
祝ひ。各まづたんぜう一
祝して祝。位のそる下とく
序べし。上あるべたと
ひおほしわ位ひさくとも。
左上よりしべし。○凡
左ふくよへ。位のそる下と
ふく名こげう序をな
すべし。諸人儀よなべう

じ。或親戚の舍より幸ひ
共効とかくはいぎくす。
一時位よろべし
亭主膳をとゝへ中して受
一盃く一礼すべ
とゝ為箸を揚んとする時を。
先ねば及び亭主より一礼
く箸をあぐべし
ゝ箸とゝれば。ゝ
まのよゝれぬのよ箸を揚と
小指ゝの間よりさゝ。大指舍

指中指の三指をかく飯
椀のふゝ紙をゝて左のふ
掘し。又箸椀のふゝをゝ
く。飯椀のふゝをゝとよかさ
わく。右の傍よりくべ。
ゝ紙行椀のふゝあゝべ。
左のふゝくひゝくべ。
引おゝ七紙行椀のふゝ。
啥ゝ向ゝひゝゝそゝ。
引蓋の行椀の数多ゝ剤
八人舍ゝ汁ゝ平ゝ

こさうくらう。こうひ喰へば
きと思へ物も。汁椀乃蓋
とゝのべ。どうざうハ北礼
なわ 川蔵の汁こゝへ腦とよび
摩こを 二三れ腦ようずして。たぐ
紙と又
先飯椀とたのもうくあ
げく。箸と喰へと喰くトよ
一箸二箸飯と喰くトよ
をさだのもうて又菜椀
をあげく菜乃実を喰
又飯と喰菜と吸実と喰

く 或ハかくのごとくすべ
乃汁と喰へ。ゆ猪の汁
二汁あるべたのあるあ
汁より喰へべ。ゆ猪の汁
たよあるべたれ汁より喰
へべ。ゆ猪乃汁とくハぎ
ゆさ紀よ。他の汁と喰へ
かゝど
飯菜汁飯菜汁と沢
て米乃方も喰へべ。飯より
汁よ物ゝあ。汁より汁

揚り。蕎麦より飯よりうつるも。
ふるあ〳〵ち汁よりこの汁
ふうつるもの〳〵
二の猪これ猪乃河ハ。せんか猪
乃飯蕎麦飯と二三杯も喰
年てこれ。中猪乃飯と喰二
杯蕎麦と吸。そこびこ二腹の飯
と喰くく。中猪の飯よ喰べし。
三杯猪もみかくれごとし。
二の蕎これ蕎ハ新麦よ
つくく。家喰ざる河のさめふ

うと来蕎すまうるどよ
てすりけりみハかけとかへ
ようつくろふ喰ふた
めけり
河ふ猪ハ喰どくくう。老
人ハ喰くも若しかゝず。
二の猪乃蕎ハたんのようく
ゑだのようつして喰ふ
べし。そく河もみたんのようう
つゝてそくべし。これ蕎麦だ
のようくそまくうりしこ

ゝ

れんの方よりあるはいぶんのよ
うにくれなゐ花乃ようなる
すべしぶんよりあるはとたの
ようにくれなゐ玉いろ
めいたるようなるいたの手
のくれなゐ
竹椀にて揚て喰へし。其
鍋ぐらいハ打あげく喰へ
べし。是ハすきやき
砂と吸ものきめなり。

きりんさんなどゝ砂と吸りん
と思ひ蓋よりとうつ
くぬべしげんきおいしきもの
ハ味しく喰へるものなるゝ
べし
三夫乃実をもびゝ竹の新く
ても。椀の底よりあるはと底
らひ出して食へるものなるゝ
べし
亭主竹の新とひろびて皿を
出してうくべし。亭主さい

をけぐろかいを茶とこれをし。
漆のよてよ五てく紙ぐ。考
をさいとつざんて接ぐ茶と
猛よとさくぐたんのよてう
更五まよ一れすぐ。⊙
半人釘とし接ぐ。
くーと猛よとき椀とか。
あをつさてく紙ぐ。あ
人行人何あをてくうけ
とりてくぐ。を人ハ
かさ紙よとぐ。ふ

ぐしろころかさよさいを
川行人ちわ
を人より行人ちるぐハ。
黄よすぐ。黄の鶴房
鶏のあをちバせんぐんいわよ
すぐ。これ武なり。いんと
かれぐ。いわ名ふをきて。
その汁とふすてぐろ
とかくなり。山河ハ茶と
もろぐ。椀のふをを
さてぐしてぐ。ぐのけ椀

乃ふてなさうくいてごき。
トよをさそはそーをとり。
お紅れもとくらべ。そはら
飯椀のふてをとりく常
乃ごとく喰べ。やきもちな
らだ先まづくれ喰。その
後いろうもすべ
あるのひくをの河へ流わろうもなくくれ
流あつく岩くくうまくもくくれ
せーとをつ某の○うま寿奏し都
紅ようすとにて
だくりへ。若うくかさふそさ
こあげいてできてそくべ

飯と夫乃せへ。お使ゝ辞儀
てうくべ。お使もみたう
辞儀しくく交べ。もろくと
同じ。二沢うくうくうり後八義
儀ようとよくどと
飯美貴合つくさどとそかと
ろもくくかべ
汁乃再進かつくあろあい
のきをまくこせくけとよ
べくど
飯美貴れ再進かろべ

飯よ汁とかけく はけの実
とくんづくんど
飯を喰おりんとする時。二膳
あるべ二ツ乃ちろとかけ。二はな
ちの汁とかけく。飯ぜ
きくく喰ひつくすべ。ぜん
膳も喰ひたくもべ。或云
飯膳あるもくくかく
ど必くくひつくさぐかるへ
ざろよハのくど。その時の飯
中ゝ飢飽病者ろ。うを

ゑい飯よ汁をかけざるこ
くろしかくび
酒さいでぱまづよあすとぷよあ
うわけよ鮮濃して交
べし。或上あれんよまるせて。
亭主より試さ。下座より
試ろも肝宜よろべし。也
俗かんと試ろとく。亭主
より飲ぱさぐもまつろ礼
よあうど
湯もみ酒と同じ。されども

とぷいい岩亭主ようげ
のひなり
汁とかつくぱいまぐ拵まぐ
ろ閉ま飯と合やうく絞る
野人の礼なり。必かくりつべ
かうど
夫人ろおくく盃とた
のよ弘だろよと注く
飲べし。肝宜よハたのよ
ろく飲べ
ゆうよたよ主ととうくぬ
とかくとぷを人とれをでかろ

のこりたる。鍋にて。
よとをいく度もうつす。
吸物出とよ。かしらひのたゝみ
かとりが笠とをふりぬれ
よくこそふき絞りて。
西こそよけれ
たゞくに移すべし。ぞうたよ
とりばたのよくすぐふ
ふきたるくぬんとあくべ
し　笠の丸西こそ。椀のとゝき
ぞう。はれ引蓋の際たし保な
丸吸物へ船よれ出ろと丸合

くるあげ喰へべ
吸物ハ丸一笑と合ハ汁と二
口ゞ吸べし。そゝぶはん
ふまうすべし　○常よ吸
物ぐりぜるハ。えん汁と
吸くく笑と合ふべし。是ハ口
かつきうとぞうかさん
ためなり
引蓋ハ笠とさうさこう
丸西し。丸指小指乃あ
指くくよぐうぞ大指合指

中指ゝくく椀ととりあげ。
左れをふうつ。そんけをす
ひたるゝ　そんともとれごとく
吹ゝこれ亜しく実証
ゝべ。下にとくゝゝ。みんな
ゝ。ゝとくとゝ
湯と飲ゝハやんとさくさ
ゝ亜しくく膝のゝとき。
なをして椀とあげく飲べ
し
ゝ塩ゝ乃和とゝとゝ。

ゝ塩并かうの和二特
一四ゝもゝ合せゝと。湯の
何ゝあゝざれゝくゝゝゝべゝゝ
○ゝかうの和ゝくゝ合
或一杯ゝても飯の一杯と
かゝくゝとゝ。飯の何ゝ
くゝゝべゝ
湯乃中へゝ和とゝくゝ
ゝゝ。ゝ香和と吟。湯と飲
ゝべゝ
上ゝ飯ゝ羹とかけゝ。お付

の人も。茶飯よけとかくべし
凡再進とうけ。どんびの汁
乃者ふを客人よハ。客ハおけ
とかつわこ。おけハ人と客と凡
合せくらし
飯ハ大口よ合ふ。ちゃ。
口ゝ茶くらく長くすると
なり。凡茶うちして食ふ
ゆるり。
串ふさしろ物ハ。茶うそは
さとあげたらもく串と

凡茶とそくく咎ふべし
凡椀の内より和とふろべ
ど。入ゝそ凡しくわとこ
さむべ。沈ぱとさ出し
て物とくふべ。ずぱくく
口よりせくくろべし
箸ハ禁戒塩乃串ぞ
ぞくく豆のようこどさこ
つくとえ
豆ハ茶の
こやすくどゆ人よ新とうころく。
ゑ乃ようとりてさむとい
茶かまるも茶をうごかして
ぞ。はさいとくさまんとして。
ようけらかの乃さいとくさまんと

くちこのさいこ
うにくとよくくしと紙ろへ山椒。
茶とかく歯とさしとるべき
禁ずべし
茶乃ね根ハこ折こそとの
れこまの根ろべし
茶を脂よくふ初湯よりう。
飯羹椀のおよとくむ
をくこ食しおりくもこと
乃めく飯羹椀のおよとくぜ。
或云結とかとハ湯よりう
くと飯羹椀のおよ煮ろ

と茶をねくより極ハ飯椀
と羹椀とのあいごよすぐう
つくくべし。喰辛てい。飯
羹椀乃おの初乃面の根の四
よれくこくべし
ふあくもと以
ちもの間宜なり
九飯くくべ羹新の椀と丸
あいごハ茶とと丸西し漆と
小くくべ参ふくもかく
れごくくすべし
或云新うどハ。
新のくあくまり。
くこと逢よ西しもぐこ西よ
詩よくく新椀ところべ。ハ

たもと海よりからべたること
さしもとおそうべし
飯ふくふつくだ。ぜんまいく孔。
級椀よべべ
餐庭のうち。初中ハ。三次の孔
綽あるべ。初ハ。ハ。ハ。
りんかくうとといひ中ハ。
理叮雪かくうとといひ海
ハ。金く。海の会ハ。
いべ。ぜんを来れ
ぬうくんとつけく海すべし
菓菓ゑ出ぬ。ぜんとたるして

豆揚たくかくうく椀ハ
とる嗜べ。ぜんハ海くに
嗜べ。ぜんの再をれ菓ぐ
あく。再をとうくんと思ぐ。
口孔と嗜ずくて紙べ。毒
進とうけまぐきとかりぐ。
口孔を嗜べ。一汲ゑ同
ぜまれおうて。ハ。椀ハとれ匹
をこ一歯とうくその椀
椀と懐中ゑべとる。ぜ
孔ゑあるぐぐで椀ハ。ぜ

入て洗ふべし。歯をさすには
ハつが懐中にて楊枝をおして
さすべし　或ハ楊枝ハ亭主へかへりけづり
やうじの入れものへつゝみ
是を懐にすべしとも是を枕のあんすき
客ハおのおのくわいしやうりゆくやうすに盃
よおのそばにて山池と膳にハ亭主の座
鮮の時ハ亭主いづれの楊枝わらきこわられ
バ何とゆく懐中すべきや。今世俗す
こき座の床にこしぞうとやう紙の鄉そ
えんりのよろしく座敷の床ともみうう
座の紙にくこもとけうごとし。是所
致めづきさる
すべし
会席の後楊枝とゆく歯とさ
もゝさんのあよおのかく。
さすべしば同業よいくし

かしぞちそれにもみだりには
歯とさすハ非礼なり。もしさ
さんと思ハゞ。口を脇て
とゆくに口を掩ひ歯をさす
べし。盥嗽れおよ食後に
どりり。此時歯とさすべし
後れくりかくよいでこと
かこしかしなまりりぐし
なしのに上ふあんお傳と辞
識しく後の紙と出しては
きかがふれくお供の人に

さゝあすべし。かるゝずゆく
ハしなるものくらろハ。
世礼なり
ねのくり。核あるものいとそね
と鼻紙うつくこと後よいし。
起るの時座の情よろべし
食物をもべ茶菓をたりしハ。
上ゝ盃とり起ゝく盥とつりゝ
べし 此時盃とてうづ水ゝべ給
さすべ
ひ座ゝ此ゝべし。此時清茶と
出すべし。数客ハ乃礼なりハ。

主客ともに働ざゝとゝろ。
俗ものゝくゝ者ゝよおゝて
ゝ菓子時いゝ物ざゝと
ろ。これゝられおよゝごと
く茶礼ゝあゝくゝわゝま
ることなし。ち院ゝおゝ
てゝゝゝゝゝ腸物ゝゝゝ
らゝゝゝゝゝ礼ゝゝず。
銀ざゝとゝわゝく菓ゝゝ
べゝゝゝゝ銀ざゝとゝろゝ。
見ゝあゝゝに射ゝゝ乃神仏

常れ茶碗を取あげ三口
飲し飲ぐそのあと
さ。ゐ飲口とくるめてくるとと
ゆくめぐひ。ゐ沢の人を涙
を。沢の人うけ紙をよこれ飲
う飲口と紙くるくるかして
くてきのひるたおろ乃ごし。
かくれごくひ乗して素足
乃人をいてくるぶ未発れ人。
飲早くもろ茶碗を上家
ゆかへくと。上家うけり。茶

食

茶碗を呑
の法ハ。亭主わ茶碗を。
上家うけとりいてきて席よ
ところ 茶碗ね付の口を傾りおね付
小茶色とんとるお付名
うどりとりくる茶交と口ろ。
上家ね付ふのめと辞儀す。
ね付をのくわけく辞しく。
上家よめぐ。上家れいく。
まに辞儀せば茶をくな
ろべ。まぐ紙とり飲べと

ろくまとかさねたる茶碗とを
そなへ次ぎに人をわたす。次ぎの
人は茶をもらく。亭主の人
ようみとをあへかつとを。その時
とをあるみあぐろう茶の者
とかざかいてぐきてくトろう
をく。亭主は山付あく。茶碗
はとらべ名一礼すべ〇礼
ぬり茶茶といへば。花の
茶を〇略〇ろう
礼なり。ゆ引ハろく茶を

ろべし。まり茶ハ只敷
宮の屋れ間ろくのすり
茶茶出をはふくさん茶碗ホ
すけく出すし。是ハ茶碗を
るいざ熱くしてくるとうし
ざるゆへと沸く。茶碗ひゆり
あいざハすけくのしべ茶
碗ひへば。就ハ人ケりともふ
くさ拭ハとをとくく。茶碗
ざるうめく飾べしとく。
をへうとをのおこつ巳

とくべし

指よ向ふのほうが角かけく。縄

太のあばくけろげくあるべ。

亭くと脇をなげせといひぐ。

太乃足とおこ出しくん

かまと吸くうれ足とつこ。

あとり足の尻ぐろつくふ

すべし。伯くかくりごとくを

もくと兵命ぐとい

凡長寸しくい足ちびく

りのなれぐ指くたたのわ

指をうごくすべ

凡伯よいかしこもうとこ。

足れあのわ指とかこねくの

わ指をえるあれ踵を腎よつ。

なすべし。

たたの脇のあぐこれど

小角ちあくと踵乃とこ足

をこかり○毛吐の肘の腎

をたの踵よしせく。たの足

ばくけろげくわ指とうごも。

み脊とたの踵よしせくた

乃足をくつろげくわ指とう

ごうもんに堪ずして坐をとゝのへど
も是をもてなさざるものなりく
亟とするれば客亭主をふ
ぶんをとらかわくに中食をとり
時に巻三郎より土器二門をもて。
物出くそのあとにく
くいろ〳〵のものあり主人錄
儀あるべしとおりく客あ
りく是をとる。故のもて
あり巻をとるとて土器は
うの酒をあく飲ゝと亟

乃元に仮とこがす土器よりもてこ。
なりへぎ二すぬち
紀をあひよりもるぐ。ぶんれ
大物うくわくの。ととしい
さぐきて飲口とりよふ
しくかのでくくかさね
べし紙の三ろ紀をいてぐく。巻城
京ぐとうくこ方成三飲口の
かさわべし酌乃巻をれ
く。亭主のおよとく。亭主
よあひよりて巻城敬のもれ
あにるとくく土器をとれ。客
乃飲口城ふあうくいて

さけはかうもそさ
又一ぱいすゝを飲よむき。
酒を更に飲。此ばかりとさんの
起く者とをさる
あり。此河は夢の通て
ぜよく。家る所起ば。
はすこ出く亭を
まろうべし
たのもとためしよくびのあろう
よろん者とうけ梅坊ろく者
汁をそつくいてきうけ
と魚道のつぎこよ入巡みた美
さうり酒とうけく飲。
かいてきくそ巡い

旨ぶれたくし。夢を一ぱい
者とをさるのもるおのれ
夫人ろう語り者といてぐる。
なたれもとかさ稼ろもとと
ろ。あるもろひいちどつるく。
悩くいてぐべし。やまろう
者とろるはたもとたいた
よをひぢのあろ三法そと
いてぐくし
夢をはそ乃飲ろ巡乃飲
口れ弦ろく飲べし

夫人は盃とまいらせるよ。
をげうの盃はいとくづし。
下はとくを敬のちふれく。盃
ふかをくなり
おろがれとかを人の飲くるは
とた茶はうつし。そた茶は
洗るのはとはとくく出るとを。
是と飲の法。を人のおはて
くるはんどくく孔とすは山は
敬のを洗るとはあるか別洗
るのはとわるあるとあるよ

てを孔を人はひくく弱でい
くき下とのを敬はひくく
酒とうけのみを人はひて飲。
を盃を下にとくく者乃
あるあるもの盃とうけて。を
人はひくく弱くいてき。
なの者ふゆりくを者城
懐はい是のみを盃とあはうて
を物酒とをとしくいつく
飲その盃といのはわて
退くなり盃ぶを

大流こん。五人酒とお飲かけて洗ようしくしく酒洗
紙古こまこんと云。是と飲
ひけかりけとあいてでうど。
洗ての酒をうけくはてで
さ飲べし。元ハ五人の酒洗
ゑ。あゝ少人その酒とうけく
ねいてでくなん。
まんぢうと喰ふ法。人数とあ
げもちくつけもち
ろうてかくのごくせざれだわんと
かくくろしかくず

たの一所とトロとさたの
一所より喰ふべし
大丸餅乃数の丸を拾ふこと
ちゝと二口ゝ喰ふべし 二口と
くとなぐ。一ことろと一口ゝくべ。
二口喰ふとい
ゝ紙ま用のくちゝなり
てんぐくしたなり
魚乃やきものとくつを表づ
ゝくくべし。うゝと思し
てくひろあとゝとおかめべし
まゝ人ゝ云紫出るふ。左の方下

乃義係蛮礼却て至礼
山椒くへべ〜どぴすくうゑ
あり。用ん寸べ〜
綱とかぐめくくくうべうべ。食
とロふくうくくあつくうべ
うしぶ芋ん〜くくしさくくま
くさぬかのあ〜く丸くあ。
くくうべ〜くすす
粥よ美とうけく食べうど
粥と食ユハ他の竹とくいぶう先
ユキくうまぬと食くうべ〜

茶禅ロ訣序

茶ハ中世よりこのくぷやまと
りわこて昔ふ日用飲饌乃清
賞とし。中ついくを世わが
日のかふ〜とほう是を始ぶ
ゆ。ふとふよくうぷ礼と
らざれど。宴会乃席よ陰こ
たけくいさめくつあといぷ。せん

すべき砌らひ、くんぐ思ひ、くよ
りとりかたうつきけの喫茶の式
とのごと。茶礼は決一者と実は
識者にてもつとまるべくく
といへども、猶意見の助とあらん
かといふことなり
元禄十二年清明日
貝原篤信書

茶禮口決

一 茶会の禮
一 先人より茶をたまはりんと
て招あらば、先礼を行く例
すべし。同客より少先立
人よりく例をなすべ
べくく。但とけりく
例とべし。同客ハ下ハ。
但とつとかなぐ。所宜
よるべし
一 茶会より帰ふ茶門をば。

新しき人を招ぎ数寄屋
の板と同べし。ぜんへ切
そ尾とのなり
一
茶去より切よハ。肩衣とも
とまるべし。ぜん働ちなど
ちくハ。ぶ袴無まぐハ。
常ハ衣紋ゆ。肩衣ふ
ハ。ぶ袴うけ。ちくとまるべ。
但貴客ぶうけなくハ。
そを取まく沒もべ
一
数寄屋へ切よハ常ハ
海衣とまるべ。これ礼也。
紗袴ハ切沼ちとも
きハ。そそく切べ。
反ハ。ぢ肩衣とまるべ。
冬ハ取まうぶ。
ぎぬ。ぢ但付宜よるも。
冬ハ人ぶ。但ちく
をくるかぶ。反ハ必さ
ひとまるべ。汗出れなり。
又行乃度ぶ付まる沒
せさぶ一二ぶ切せ人

一お家一ばよりべし。遠くふ
ゆるバ亭主か案内をこゝ
ばりけよへくぼる事ハ人
をお紙べし。お家何もあ
つゞ。喚瀧とかけ。みの板とかけ
とゝべ井ゝく業べし。ゝ山
二つの和ゝ口とゝくゝを
由亭主へいるゝすべ。
さゝく亭主中れぐり者
ひゝゐ出ゝ何ふ一れゝゝ。
亭主くぐれ戸とゝあ。

亭主数寄屋へぐん時と
家より中くぐりし戸とあ
けゝ沼ゝ入ゝ家くゝ。
ゝ作ゝ居ゝ井ゝ
とゝゝ何紙をけう。
をしくかわくゝ
合せゝくぐりに業べ。
ゝりゝゝ
とれもゝ。光門柳かけう
角元と亭主。柳色ゝ紙
べゝふゝとゝゝゝ。

たたみ見一面よりそろ
つくり。面あるいは四方沢
山杉板竹の皮笠あるべし。
家毛と用べし
一
凡中くらいは入ぬくらいの
戸とあけ口入口四方沢
の厠の戸とあけ口くり足
て。おれごとく掛がねを
とき。梅こもを敷んぷは石
炭殺ちぢ結く足新い道
をちらりあるべしすい新
ろるぶりり。ぶぶりりあるも
一まあれつるひ柳いり沢柳い
ろろまくさ。ろうまあくまの柳
ろりまおしまくく柳も。
沢よもろさこと。梅よあ竹の
おるふ上り。法乃表と見。
ひまやくの系面れんとて。
まあつひ。ひひやくの梅よ
ろとあぐ一すぎおろご
ろく笠。板刀柳の上に棚か
刀。下に編ざと面ぐらと戸

をあけ。をきいてまとうけ。
をこさ屋の内とりく人ま
り。扇とわきてくうでま
より。扇とくぐりたさわる
とき。せきでことかべこえ
かけく。屋おりまのひぐま
づき。鍋ものとんざいうめ。
たかれ至合とりんを活ろ
ことんくゆくさあてこう
扇をとりて。板よりをなと
ろへ。おあれのどろざいめ

ようつは棚のを合とんか。
ゆの汗ちく同ト。下あ戸
とさすべ。ちあの内ふ
ちかでくくも。扇とか
しいまくにけくべうげ。低
合の内ふろ。かうど。茶
のうは必つるれ
一亭ふ茶五ま。ぢつは一礼
あり。亭ふかまとあげ。ぢを
おとさんともろは。よちわ
ぢへ一礼。何も紙のきな

まの下ぬれ物を塩ひと足
ろ。相亭主客を座敷を亜相色
時。客かひ。亭主もまた
ふ紙書給れふることおり
何ふ。ふらしそ乃べ。下
座へ沢山迎し。上座
より上座へ西を式座配
ようり。下座より西亭
主乃あるまもあるとなり。
相亭主薬乃ことを初へ
饌出すべきやとえけ。客よ

一
主彷ふ沙弟と云
今席乃座配のる。西ひ
口のつを紙ようりちがべ
し。こくく西ひ口よりわよ
ちをきあるよ客乃べし。
かしひ口をきあ下座也。
是い合乃ける。乃のまち茶
乃時い入かりるべ。口の
あるうようり初も相
も初かしどまを座
をうり

一 西ハ日ぼうさん者す
ゐ附ゑゐかーこまゐ。梅干
出バ下ふとうどゝ平ゝく
ゐ和いてぐくべーぽー
干ゐ梅ねーバ苦ゐふ
きとんぢべー
一 川ざいこがしねゐーバ干
のとくうけれべー汁
も同じ。汁ハ梅干茶ゐ
どさきいよ食すべー。凡
ねゐの食の四ゝくれ食ハ。

食べー。ゐ食のこーゝ
ねハゐさとすべー。俺ゝ
ゐくハ食年くりざい
ハ器と干ゐよ手そよー。か
ゝとゐ人多さ有ゝそ
ハゐまく西くもよー。梅
干を干ゐよゐ附ゐ干。
ゐでくべー。菓ゐ出とく
ひ附ゝべ。ぢ屋の人菓ゐ
れ乃ねとれわ附ゐく。逆

口のさいはよ五月ぬぎてあり下
座の人ぶ一礼すべし。立
さはるよりゆきあるより。柳のか
ざりふろの内。茶のかけ和
おどかさるゝ金れよ紙
見くゆ中ちすべし。これい
けじめ和室の座よりつ
ぬぱあとゝ人あれば。
いうりくしてくん
ぐさかゆ人ぶ
見ろかり。初ろ内ぬ

く見ろべし。詩ろ入人つ
うゆるかゆり。菓子と食す
ろ月時ぬよりあとをそく。
又ほあと入かゆろ。座
敷よお行くまちろ
ぬゝゝ佛ざしりうさ
くもりべし
一
中立れ板ぞなろ入れ
第ゝくけく書くゝ雪
えべおろごく。ぬろつ
ひ和室の座よ入べし。山は先

床の花と見かざり、
つるとんろべし。亭主出
し給へ共、客もいろすべ
主へ同あいさつすべし
一
茶を茶碗へ入る時、亭主
茶をわかす。客のあと見
く薄茶あり。是菓子あり。
れぞおりくいつぐと云こと
ろ〳〵。亭主乃指図
客より口をかくれと云
べし。菓子をとくとく出べし。

而ハかざりこの中ハ
べし。亭主の人茶碗に茶
弁当を而ハ
先のこれへと一礼し。指図
くふくさを取て沢ハ茶碗を
ふくさを敷ちがへ
乃ち而ハ
さくおろす薄茶。
拭ふくさ紙ちもそ
たるようつし茶碗をのせ。
おろへ茶乃色と見すべ。

茶碗の茶をたのまれ
ぬくとうふるまれたいすじ
かけくらべ。ぬくとうできこと口
口のこと弦と大のびのえら
をのくめぐひ戒くらかづと
うくこと指とめぐひ茶碗
行もうるかひわらべ指
あて茶碗とめぐひ茶碗で
いでこうくやぐ飲ころ時
れたもしこうくおろま
酒をぱ時もわらうハ和のむ
時乃ごとく。おろくい
ごく時酒しこうたれわ
ふべ。梅おろ和おまなく。
飯ろあ和おまなく。
上ろ和吾口のはくく飲
べ。ろ仏牛ろすす
ふくさハ茶碗おつさ
ろれこぶれ家こくも茶碗
ふ。茶碗ぐりとりくのむべ
さハ上ろ和牛ハ下和の人のこ
かつすべ
ちまひ茶碗上ろ也。
上ろとりくたんのまま

わかく。茶の氣をかごゝく。
左のひぢを下につけ。右の手
をさゝげ。わりを張茶碗を
膝の上にまつすぐ。茶碗
を戴いてこゝく。次牙
ふ陽を。又下座の人と座へ
直をさゝくと茶碗を
取いてこゝ。さて。しばらく。
座へ直をこゝ。亭主
かへを叩し茶碗乃おて
を高かへ。

茶の事をかゝ下よ亥
ゝ乃ちゝ時茶筅の
ゝ亭主淺茶の紙
ふすゝき湯入る時上茶
巾仕巾ゝ
主茶かゝの者人ゝ
者ゝ人と云ゝ
茶筅の位ある人か
ら上亭主
べ。ゝゝ
亭主

ていこうをさくに仕立
いへとつゝべし。亭主もも
ゝく落茶をうへべし。
とうまつくくそばゝ二ゝよ
つま茶入ゝ加へゝと薄茶
もべし。亭主かゆるよそ
ゞとおれ茶ゝくうす
ちやとゝ入べし落茶ハ。
上ゝ五ぐぜんなの
ゝよのまゝしべしさく
ゝま茶杓ふくさゝて

ぬぐひ茶碗よ西仕立
ゝ茶入ゝとひ入べし。茶
入と亭主もくゝかぎ
ゝのまん中ゝかへ
をゝし同じ所ゝくべし。
入ゝ入の茶入のそばふと付
ゝとつきかゝる時。亭主よ
ゝ茶入のふくさ
ゝと弁ゝ下ゝ茶ゝ
ゝと仕立れゝもきゝと
尺ゝ仕ゝ薄茶いゝ。

茶入を、れふくろをあけ要
のつりゝ五三五茶入と尺ゝ見
もんてうの小袋にたゝまゝし。
くゝゝ四と尺ゝゝよりぶか
くてゞうゝゝとゝよりすゝ
てゝゝゝべからばゞ尺法りゝ。
ゝゝ結まゝゝばゞてくちゝいさ
ゝゝうゝおゝひゝくゝゝ発よ
深水濱と。ゝゝて茶入
れふくゝゝゝゝゝ茶入のお
もくおゝゝゝゝゝふゝゝし茶ハ

ほけゝゝゝゝし。下先ゝゝ上元
へゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふゝれゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
く。茶入のおりくゝと親ゝ
へゝけ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝと。扱ゝゝゝゝゝ出くゝ茶入
とゝ町ゝゝ一礼ゝゝ。ゝゝゝ
ゝゝゝ新。ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ問ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

もゝとをんそく。釜は
あげ下ぜと月ろけぶべろ
つまれさいふうりぷ下ぜおか
くゝゝく。炭屋ぐろ紀付。
ぐろうそことはれそと
つぷろ下ぜれかどうき付
いつよろびど。炭仕まひて。
釜とかけぽるこゝて。
羽帚りもくけき田ヨ入。
ゝをヨ又出ろ付。ろ解し。
ろぶろ知てゝく出ぞ。

郡郷りけより。ゝを送ろ
と行厚く術ゝく冷べし
一 茶入乃代と ゝも出す。
茶入のもきこうべ付のあろ
なゝべ玉べし。是も玉不
月ゝをぷ。ぷんたろよくう
乃あをぷれたのよろよ
のせぷれぐく不ゝとき。
ゝりぞきくくわろへれし。
又れぞくたのよて。
ゝりとゝれたのゝのも。

打返しくるんでなかのぬく
うらへ。ひげさるは。内へ
はと。へひげさるやうに
く。法のまとおろのまま
おしくるまとおろれも
たれでくるかんで下をうり
ゆうとうは。上をあるく。今
度は法の方をまた方
へるしくもひげさると
ば内へはとへくまし。なの
でくるまべし。さうどめ

いた。ときはなるべし
一茶をやくとこひんるは
お。茶入とうつぐなるも。
袋も同じ。茶をやくとも
さうくわらふは
うづ。茶をやくと出して。
とおし。袋のまとうべは
方なるべし。茶をんを
くもも。わくおろの方
へ出し。はくまるおりて
とんぢうとうとんぢれ

りくれかいの生とゝんく。
丸ケ瀬しゝ。ぢのまとゝ
ハ夏人ひけく至べし。丸い
の夏い菜とすつふるわど。
ふしうとゝとれど。丸至
をゝもいんはあるべし。地ゝ
至ゝハゝとうゝそゝくゝ
ゝ。迄ゝを河ゝとゝ亭
ゝ夏人ゝ。ゝくゝうゝ
側ゝゝ至べし。菜入袋菜
ゝくゝふゝくゝ至ゝ河の

至ゝうゝ菜入とゝあれた。菜
ゝとゝあれたゝくゝ亭ゝ
のゝ。袋い菜ゝのおゝて
ゝ。ゝつがゝかれごくゝ也。
ゝゝ川至べゝもゝ

一

ゝの菜亭ゝあゝたゝ丸法
ゝ次ゝ。ゝ法ゝふゝ湯わゝ
ゝとゝゝゝゝ。ゝ法ゝ
湯掛ゝ白ゝ厠ゝ円ゝ毛。
亭ゝ遠ゝゝ出ゝゝ上ゝ
ゝ湯ゝゝ円法ゝ入ゝ湯

と次のうあつ湯しよりはつ
門張り紙乃り燈の至るよ
に間の板やうなごとくなく。
行燈とあれ張りけれまつり。
圓座のとき厠の円ると。
えんと入れるべし。次乃高円
板より入れ。ほくくとなの高
よく物と流しゆ座乃高
行灯円張りよへべし。和へ
はもくとゆうふんてさ
わるを光ゑんとちとづと。

ありはよりよりあへ流より来
る高円見もとんゆうよ
行燈と板ゆ下高へ先へゆく
高円見もとこゆうう
よ物とわくちりべし。湯
沢の石燈籠乃べし。よ水
行乃下へ沢行ゑんより燈至。
沢円高よ例乃ごとく一礼と
くよあとつへ。板もあ仕
障乃掛乃下行ゑんより燈
至つく乃編指掛よあげ。座

に入べし。下座の客は外露地の戸をしめ。中くゞりのかけ金をも掛て。それより炉の脇に亭主の座へなほるべし。上客より順くかざりを見るなり。常のごとし。床の内よくハ大かたに見るべし。座につき。亭主出て一礼常のごとし。亭主炭をせんとて手桶持出。炉の脇に置。炭斗持出んとする時。おの〳〵見んへ。

れかざりを見るべしと云時亭主は勝手へ入て客ハ客それより持かざり又は縁側亭主柱など見るべし。床の掛物も見るべし。かざりよりまづ見て。床より先見るもおほく見るしかれど。其節客の挨拶すべし。先炭とり見て。炭をそれより見て。炭の内見るを見しかれど。床の

尺ろ時よ炉の皿とたのよ
よ炉尺るべし。掛ねよかぐり
ふぐのゆらぬ炉よ嵐の下に
ながきぬ炉よんろ炉あるべ。
そよ炉亜にたよ亜の
ろたぐ尺ろ。赤尺乃
ろたんのよ炉とかぐ亜よ
とべし。玄席の間よ炉と
よ尺亜よをさく食らす
べ。その餅い亜よかろ
かし。茶菓よとはろ中立

れ時いだい目より。炉中切
うぐひ。茶ハ尺ろよなど。
たぐ二ろまぐ尺たれば
なり。松茸屋ようり出編ざし
炉炭と炉。湯ゆ冷ふもべ。よて
炉ハ。夢ようろ初五合
ぐ中ろ五よろまぐハと
かぐろなり。炉炭ハ刀紙尺ち
亜乃炉。嵐尺ろ入べろなり。
椀ろく炉ね茶あらべ。炉
炭と炉和乃ごくよろつ

うひかゝりの下に約束をたゞ
に入べし。家に姫榮わゝべし
るべし。時宜によりて花も生
べし。だうさい取り花いけき。
もとよりかざりとなる常れ
ごとし。亭主茶をそんと
るゝべし。ゆゑに人に炉古傳は
へかざりにんをさうまた。
みに炉傳をく亟合ふにん
べし。家に姫榮わゝべ二茶
に炉をくにんをなげと。

花わゝべに炉をくにん
べし。さうく
るかし。茶立出されたる
炉を傳無中ありうきさ
ふに亟しー。茶碗もたゞ
傳乃ごとく一礼をく春ず。
茶をくく炉古傳のあ
に亟。炉柄の方を客に
おこしてそりざをそよ亟ず。
ろをあらを常ごとし。茶
入出べに炉をそんをく畳

わりよきを取て亟し。茶
入とゝのくゝ出し。人徳也
ゝつねのごとく。起居常
の所作をもつて。脇匠
かざりをなすべし。
いで客きくゝんどの
おもてなしめ。鮑と物掛うけよ
約べし。約鮑に亭主かを亟し
取よ亟べし。初亭主れ亟
取ゝ亟ゝわゝくともわゝく
ひゞゝゝゝ。初の取よもくよ
ゝゝべし

書禮口訣序

書礼いとゝ源
朝廷より出ゝ其流武家
ふ廣まるまゝ。其代の法つ
まひゝふゝそ。それとゝろ
せゝ書多しといへども。
ゝゝ要とゝゝべ。日用
婦つゝ言へ乃ゝ式よ

うるはしくこつるとゝ今世ふ
廣中有り書記れたるこゝろ
の円とかうぐ(ヨウ)人(ヒト)部(ベ)を要(ヨウ)せ
ゐらして紙(ヨミ)(チ)彌れたる者
もとのこ
元祿つちのとのうし穀雨乃日

書禮口訣目錄

一 書法(ショハフ)故實(コツジツ) 上巻二丁
二 貴賤書法(キセンノショハフ) 中巻二丁
三 墨池(ボクチ) 中巻九丁
四 用字(ヨウジ) 中巻十三丁
五 書式圖(シキノヅ) 中巻廿二丁
六 名称(メイセウ) 中巻廿六丁
七 名數(メイスウ) 中巻廿一丁

八 神祇 下巻二丁
九 官位 下巻四丁
十 疾病死喪 下巻七丁
十一 僧家 下巻九丁
十二 工功 下巻十一丁
凡十二條

書禮口決上

一 書法故實

公家書礼云 後宇多院弘安年中被制定至于今以其法為明法也武家書礼云 北小路院永年中。鹿苑院義滿云。命于今川小笠原伊勢之三流。被撰武家礼法及書礼法普施于世武家。其後 後花園院永享年中。善廣院義教云。於文殊

寺又命右三家被撰書札之
法。本末上下通用之。其後
世為戦国。都鄙紛乱。多
羅吾大列世時書札書式
滅亡矣。近世一統之後。天下
泰平而書札之法復用于世
一夫書札、法式古代より三
色有り。三色と云は内封・諱上
腰文有り。第一内封と云は文の
端を切て紙にして包て
上書をもつて之を包れ

紙より手ぬぐひ。包て糊付て
封じ上る状。是内封の略
式也。諱上書の式。近世乃
竪文にて状に頭のみを捻
り文に結び封じて上書
する状。是内諱と云の略也。
腰文は上包なくして紙
ぬりにて結び封とする
ゆへ腰文と云。今は紙より他
に用ぬ。紙を以て
不包結にて封した紙と

書く封じしるハ古乃流久の
略式也。右の三色中にて肩
書脇付等位差等習ひの
あるハ。内封より限る也。流ハ
流文也。漾と書ハ古より紙
封の法なり。雖然を世ハ内封の肩
ろかり。雖然を世ハ内封の肩
書脇付を取る。のまゝ物よ
ゝ認む。
一謹上書ゝ時ハ礼紙ゝ
ゝ書ゝ常ゝ封ゝを白紙

一枚ゝゝゝと上ゝゝ。真上
と竪文にもろかり想ゝゝ
礼紙ゝ文紙三紙文紙の礼紙と
ゝゝのかり。文紙ゝ礼紙と小
文礼紙ゝゝ礼紙と用ゝゝ。
ハ。文紙乃礼紙と用ゝゝ。
文紙ゝハ。本紙二枚礼紙一枚上
包二枚以上文紙也。同書文ハ
下書ハ三紙ゝ礼紙と用ゝ。
三紙ゝハ。本紙一枚礼紙一枚上
包一枚以上三枚。三紙を書

く用らるも也。反紙は礼紙とも。
名のごとくいと書ほそくして
もゝ中より折くに二つに切く。
是二つ乃内一つを三つよし
くゝ二つ分とは紙は用三分
一を礼紙にして。今一つ油つ
ゝとゝとゝかゞに切くよ宅
よ用ゐる也。是故に反紙の礼
紙とは。竪紙よりあらゝどして
少さく成ホ文の礼紙とも。
三位の礼紙潤極切ゝ事

なり。無別儀と云脇付を不
書るは古よりの礼法にて乃儀
文に謹と書と略して用封
の脇付を用ゐる者也。是を
竪文よりの脇付と略して
し不若と云流に元来儀
上書は略式なるゆへとつ
くなり儀と書いとせい廉
れくに不用と見へくしう
一紙の裏和こゝも。吉の時は表
と用ゐ凶は裏と用ゐ

一紙宮ゟ唐名とまべうもと
云礼せ人のなを唐名ゟ書
い敬なり
一連判い出方せ連書い被申せ
一紙乃ゝ〜より筆初やうぐ。
口れ礼紙三寸六分。月日ゝ間
三寸六分。月日と連ねの方
三寸六分。元と三不三ゝれか
ねと云。元敬と申酒極せ。月
日と連不の方三寸八分ゟ
去附ハ行敬せ。但永文行ゝ

書ゝ白紙ゟ附かく以
べ〜〜と。ゟく敬宮ハ決て
書ゝれゝと廣く能べし。
奉書大極ゟ書い三寸餘。
丁紙大ゟ筆軍よい二寸
許て餘。三寸より一寸乃ゟ。
貴殿ゟ以ゝく不あるべし。元
ぱゝより三行紙ゟ書べ
一主人貴人ゟい二月節供祝
儀ゝ赤ゝと色紙ゟ書べ
不敬なり

一拾文ハ貴人ヘ可用。五百結。
結文ハ尊卑ヲ分ケ下ヘ可書。
上卑ヘハ豎文可用。結文ハ
無礼なり。然ども当代ハ多く
結文を用ひ候ゆゑ選ばるべし。拾
物とハ何ふも文べし。拾
文弦巻なり。尚乃トハ
此ほれ此不書。尚不の下に
なるべ〻ふ〻ふるる官可云
なり

一連書乃時ハ出よ出ハ出

ぐるに付ハ中れ中ハ五
ゝ人ぐりの時ハ中べし。
下れ名字も同し

一封目ハ二つ引く点を打附
ハ賞説也。一つ引ハ悪し。タ
ハ字ハ封の字也。メハ等
字也。ハトハ字也

一物の端ハ進ると書の不得
ゝ也。進ると物あるハ別紙ハ書
相調也。物進ると中ハ
端書をとゝ也。ハハ

るとき。ゆきとゝ紙に行くゝ紙と云
事不得る也
一女房へ送る文は紙一かさね
するべし。立紙は何も二枚也。
一枚は略紙なり
一判行のゝ。大なる三重也。
小くは雲ぐるまゝ下くすゆる
は敬つる。すゆるは中下
次第あり。公家の方へは也
くるくるは賞賜也。中納言
殿。右へは下也

一名書くゝる。向の名は深て。
官だゝり書く。我名は我
まで書る。敬称也。向の名
字友と書。我友ぐゝり云
は。向の人と下る也。又向も
我し。名は友まくる也。
同輩なれあいしくしたり。向
し我し。向の字は名ぐゝり
とする。は。むる輩なり。又
他国へ書は。我と向と名
字友まぐゝ性と書べし。

ちゝ恐有べしゝ

一宛而と我名と。恐怕と行字は書る敬也又敬み紙尺ゆゝ

紙とべゝうは紙のもの也

一名はれうたゝりて。さて或下書されもとかくぞ。ちゝ人

のみかく由ゞ也。朝乃つゞき同お

一時は切りとるゝと煙草也。

ぼぐきうみ字とかゝく上べあげく書る也。只ぼ文

多く。毒気。養令れ新なる。

第一ハクみ字は官ぼんとト

よゝうけくちゝ毒無

一人れみ。額して手もわまり

は男ひみ川付くとも負

毒見ぼ何い成行るぶ紙の

よふちゝふ会すべ。紙

見い毒かゝるよい手ぐ

ちゝりけり

一色じて怪よ墨のうすきい
不敬也又恐怪して墨濃
深ゝ敬なり
一号者の方へ悪くみるを
ちいさくしつゝくべし
よ草稿よりたづゝど
一親よりの手へ怪し裏
去すべゝど私へ向し
一怪中よ国名不墨板よきべ
し。みあらづゝ。ゆ怪の字
と考べし

一文いつよも伝ようと言
敬して手書也下筆へ中
よかき中よハよふきべし色
書礼の型也文体を礼書
ばんれゝこゝ
そゝとまねく色あれ
かもそのぱむべしたりと
くゝまひをすべつゝ
つるなり
一年始よつゝとみへ二月よ
成ども今と往復を述

べし。正月十日ニ成ハ。逐日共
潮事籌ハ共下ろすべし也
一書状ハ切折紙目録等と云
紙ハ。ちゝ多ゝ相應の寸ハ
下書也。そさうなる紙ハ
共人ハ状なるべき也。
ハ切紙とたゝるよさるべ
奉紙以上なるべし。たゝるハ
ぶんしの也。又ハ合とも
ぶんしよりくゝる紙ハ
つゝくんの。又ハ切わき

寸ハ無礼也
一目録ハ條目ごとに
次第。一番ハ特別也。二番
ゝ。三番ハ無次第。各一
行ハ書べし
一注文ハ条細ハ
目録注文ハ
ハ不審ハ
ゝと注文べし。或目録ハ
注文ハ
注文ハ冠ハ一と云ハト

は数とちがへるとは数を
云ふ。一ツ出るはすべて数○意
数の字を用ひ。一ツ二ツまでは添
字をもちゐず。唯一二と書
也

一注解書うるさし。略せるは注解と
云とよんべし。略せるは注解と
字づくりと。唯定とかべし。
也しるしは注文なり。
目録は目録かし。制れは
割れなし。高れは高れなり

とくと。塀出よせなり也

一公方より御成敗と制れとなり
其國のち後敗をあらためる
はちまくるくるはかりよべかづ
かりくべし。又割れとも制れとも
同じ

一足利家の三職武衛細川畠山。
武衛は武家の名。斯波のあ。四職
代々兵部卿なり
八。山名。一色。京極。赤松

一女中方への書札物付。ちり
ゝとかく。ちりとは。紙の書札

上の字と假名よみよ書ものとまの
字ふ也。或上とまつ下と假名
よ書べし
一紙状乃長うけ物ぞ人より来
る状状ハ。紙ゐんのかうきたの
あり漢字と平仮名とをまぜ奉と
云字あり片平字也。傍字ま
らば。廣よ〳〵。横長平掛也。わ
まりふもきさいを礼也
一こうぶと封ぜるゆ。長と二ツ
き長と折也。封と云字とゆふ

きうう術也。わもすで色く封ずる
よハ一ツ引べし。一ツ引て長とう
りハさんけうろうこうろうなり
一紙目録書紙のゆ。ものよ長ま
細と書く。行くよろしと書也
三月十日
一帝後
二帝後
三帝後
かうよ行くさうろう也。文行ハ
ゐとはふふ書也。行くよとまま

和とも事也。それいわく深重義
張也。又深重もつゝきあはせる
をゝ。各乃名書くべきなり。
深重不同と事也。色々に
かゝりどして書けり
一長うつりとちるゝ。うゝ人い賞
敬の人乃名と書べきなり。
そりの内よりあひよりあはす
など書べきなり。ぶぎりの人乃名
と書い通し。何も書敬の名
を書時ハ長とこくちべし

一書状の奥とわりなす二分。
又ひねり文一寸八分よりもわり。
奥ゝくわりなす二寸ハ
寸分ど唐くわく。奥とれ
らどそもく書とらす行二
強。多尾の文とハ。三分一わり。
ゝとニッよりくきべき
一返事書の紙付　四韓　四異
四章
一主人及ぶ貴の人へ就書
なくハ月日乃長名不書

一まへ人へのまゑよりはなれりとを
るまわりぐゝぐぢ。あくいあり人
へゝ入べゝ
一まゑの場はれる。青ハ上下
共よ掛おつくちる。柿黄
絵ん安さまへ。ぬの表ゑ書
おゝゝゝるゝゝく。ゐて
或ゐくゝるど。きく。蕎麦乃
三寸ちかれ而ゑ二行きく。
かきゐるまぐぢ入る。有
いとゝんくゝう。面ハかぐで

不対様よんくゝる。乳
ゑ不見及ゝと。今ハんさのこ
不宗紙ゑゝまへ人へまゝ
時ゑハ。ゐくゝまゝすべゝゝば
一追ゐ手ゐれ場ゑハ上ると去
ぐゝぐ。場去けゝさ物の場。
以ととぐゝりまぐゝぐ。去
のちゐゑ。以ととゐ紙
不一紙ゝ。
一女中へ男れゑゝゝ物の。
俳ゐくゝく男乃文作とか

やうふちべしやのうけ
不下書人数ちよ仙万矢
言かくべしず
一湯付筆げらのす
板山角図物友
そうか
白助の字れをりうちも。
紙つまりくこうがんのトより
えべし
一年号玉紙のよ。竪紙の向
ハ筆ちりてまるちくと

へハ文福二りて八月日とすぐ
ふまべし。打紙ハ肩よ号
とけべし。まも図前
一ふふ長うけてりてす
宮治長寿 色い寿也
石田治郎が物 無かざる
前乃頭之河也
一紙はこす 古栗
朱十五日陣屋おて花菱
名丁ちふ家こ名話出と
三月十日

一反　奉
二反　奉
三反　面病者
四反　奉
又反　五〻者

奉れ右ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
一[illegible]文書[illegible]在判[illegible]
相違[illegible]紙[illegible]判
ありとも也但五の字[illegible]
なり有の字[illegible]
一連判[illegible]同姓[illegible]同[illegible]

ありやとよくべし
一[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]
[illegible]べし[illegible]
恐惶謹[illegible]
[illegible]べし[illegible]
らず
一番[illegible]
同[illegible]
[illegible]
名[illegible]
[illegible]

とちべし

一 和こきん人へ姓をそえ
どうり下まで次れと云ふ
姓二字の内一字まべし
雪中ゝそへ時長より長ゝ人へ姓を
五ゝ中老ゝ人へ姓二字の内一字まべし

一 判形のよふ名書ちゃ也。
但て賞人ゝ人ちべうゝど

一 紙ゝ和れゝ紙ゝ点ゝ事
油く短と敬ゝ手 上 何某
中 何某 下 何ゝ ゝ人
人ゝ名を与ゝより来ゝ

ゝ文の内ゝ人の姓名とする。
おれ紙のゝ下に姓をかく次
れ紙のゝゝ人ゝとちべうゝど。
姓名いとくつづけちべし。か
わくゝゝ其周ゝして出答
ゝゝゝ。ゝ古今せずんべ
不紙色しく侍ゝ姓名紙
けぐけくちべし。但侍ゝ
名用ゝ人ゝ姓と云ふゝ事
てゝとは紙ゝ。敬す

でき人。科人或敵盗城な
どをするべし
一恐怯強をなる。二分よりて
まべうしど。一縄よりまべし。色
てより男人して恐怯と糸
ものを強をと次分よりまを組
よんばべし。一流ふき色より
かくうしどとまいより
一主判之時。月日の下に下字
也。第三まべし。甲下げ之
一のり付れ物よ。紙ゑとうふ

不平書。ぶを絹よ入くと
れ小をなる文おれば
一封じ目のメメメ結糸
ようくまを残多。短い殺也
一ひろ出れる。一条二条よ出
もくろしかうど。四条六条八
除十條。文上も偶数といひ。
主の報よまべし。兄傷ぶ乃
伝れなり。偶といてうこちと
いくん也
一あく而二人の時ハ文乃四入ハ

封皮せぬ。者と賞玩とす

一日付し次ぎ嫁紙わ〳〵ぺ二三寸
ばかり弓形にくやゞそ通而
丁寧にのけく不平等或
日紙乃半ばうるおよ日付わ
らべそ次ぎこやゞくあて而ろ
くべし。ぼうりれくい勿論。
下賞よい日付の左廣くた。
左れとふ通而美〳〵
一拔萃ゆいゑ玉箱の敬也。向れよ生
と不寿かいゆれ乃玉箱れ題。

拔萃ゆいゑ次ぎ。
ゆいゑ又ぎ次ぎ者人よ風べし
一清貧又ぎ系乃士よも。拔萃
明ドれ人ぼ乃ゑれトつゝさと
仰く。尾張守但馬守ぐく
ちべうゝど。ぼ人年ゑ命ぐ。
老 胡延ゝ行ゝぐ乃。
或ぼ代ゝ付米ゝと
ぼ。ぼ知ゝと上ぼゝまく用
ゆゝ人ぼゝ云ぼ清貧者ゆ
も。門膳木ゝぐ乃付者ゆ。

兄正頭かぶとといふ事稱但し
四義本工ふどゝ下同かしよい
雅称るもわりごもはいはゆ
本工先本工助るど稱するも。
改い稱し別し　射の字なしとよい
不体性　古時つ
古来　源左衛門　四郎左衛門　明廷れ作法なきかし
一ひねもすぢ先横より他す
ぢうのうぐうーぬまり亜
ろいわしぐ。ねたよ横よわくろ
ようこ二ろ冠ふてく筋遠ろ
折ろ横乃場亜よ折べ。物

いわるべし。物ちくはけてく押
付ろる亜し。紙と付ろる。
メぬけるべーぐろーよいやろ
しぐ。みひすびた文ハん部さ赤
月四先ちひすびくはつてく
押ゆろる亜し。とれるくわ
ぐりろいか押付くろ
一女中ハれ状よハ月日とろさぶ。
判ぶるべーど。沙文とけろ
おぐいをろるべーぐ。或
去中よ那日今日ふの文去

あらば月日をべし。書面いかく
なるべしうしくくらん。穴賢といい
めんさし状略してうけろ
一判乃上中下　新貴乃ぞくれ
状よハ判の首と状れ字豆とい
くくと。同位ハ判の下字豆
とひくくしたかへをよい判乃
下と字豆とりわぐべし。ぞん
の方ハに海くくるゞ判の方
下ろべし。名系と紙しる物
また抵ぞへよろべし。物真よいわ
らゞと
一折紙之書表くくふ書
面ハ裏へ一行くくも云
くくく恐惶謹言ちゞく上
而とすべし。赤い表くくも云
おりくくと。月日ぐろり
と裏よろべくくゞと
一方乃円ゆ。ちゆとかく沢乳
るぞ。ゆのわ沢よ河の沢よ河
のわなるべし。みち魚物や
うふ次第すべし

一貝塚は高と先ず。魚と次に
ふし。酒と肴ふたつの大抵此
精をも魚野の内。精をもと
先ずすることなり。大抵はは力
由他宝ともろ高い高く帳
人は身ことをもとなすべ。
元根高具等も身ことを
知也方等も同し。所宝は
酒て先はとおすべ。宝物
いきこと也

一太力貝塚ことも。麻苑院殿御ふ
ゑて色物遍ゑ酒し。公方御
感ゑかしことも貝塚沼沢力
力硬物ゑ身ことくもの数
法式と法者ゑ宝て天下
ふわまねく無用をとんを
ゑりよたゑり中じゃぞいか
きこと也

一感状のこと。頼朝ゑり佐木三郎
ゑ給ふ感状東温源平感表記
等載之色感状の初ゑりこと。

甚文ヨ日自古雖有渡河水
夢ならぬ浪海浪例感綱振舞
希代珍書。以ものすごい感情の
ほうこいまぐこ宮らぶ感情の多
きいこ行のるもの。永徳二年六
月廿日足利義満ゐより。名
所図会ふ行ごう感情わり。色
より感情の汁式宮まろと九
ふふ
一下馬れいこもろうこよも高
おふトる碑と立ろもろうく

ト一紫い紫興を林ふと。退元下
紫れ卒行浪婆れる西坂記ろ
出ろうひ一報辺や茅宮誓
ヒよ立く流注の河摩訶院
國ノ之野婆沙羅主雲鬼ち必へ
紫清ろ一四。紫とトく佛
小判一く。下宮れ礼とあ
りぜ一ろう。卒行浪とちて
赤代ゆぐ王れ志とかしこ
ろと。ト一紫れ卒行婆ちち。ト
紫ろい紫和ゆうろれ。

それらうは木ぬれ卒塔婆の
前よりは雅と練ちりを
つくくうまうらのよう形
て供養れ人をたかくして系
法せられ京ぶ。又卒塔婆
を建けると。兄乃卒塔婆
とこ。兄乃こは人と兄ちる
れ兄也兄こ兄墨くれ墨筋
なりぬ下楽は京ぬよあ
ぬ兄は四ちよちよあり。
法弘草ちし兄下楽乃卒

卒塔婆のもりりぬらは本
地とうは板下兄ちは人なり。
手乃不屋福ちよのるも
一寄と真字がらちを畑
ちぬがらふちうげ兄
といろり
一事書は寄ちり二字ちざろ
べぬたくくこ兄次
乃ぬちは京はのるの人のくら。
物ない人乃ぬりあぬぐちる
あり兄みこちは二所ちさ

かづべし。たりたとえば
一文字使用する時あるべし
可為ゑ〻使也。ゑゑゑん
らんもゑれ。ゑゑまつ。ぶ
ハ者可為乃用。後ハ用ハ
ケ字かゑ〻かゑ〻ちべし。新乃
矢字ハむか字ゑ〻ゑ〻ゑ
ゑまゑ〻ゑめハかゑ〻ゑ〻。
奇一行乃様ゑ〻ゑ〻ゑべし。
動の字幾度も必りかゑ〻
ものかり

一起請の起ゑ〻ゑ。武門大臣元
弟湯と探れ行ゑ〻ゑりゑ〻ゑま
まゑ〻。元恭天皇姓氏と伝
ゑ者と云さんゑあ。陳桓五
ゑ〻。名為望神探湯（一決色五千）
掌見笠始ゑ〻ゑべし。紙
ハ誓詞と云を告矢と云也
原中ゑ神ハハ告祈ゑ故ハ
行ゑ也。大師勅法と起請。
天台伝道れ法大師と勅法
して書起請ゑ故ハ。大師

勅撰の起源とて。慈恵僧正
虚空と号すること也。是
慈恵僧正より始まる。起
源の字もしかの初なり。
外文粋十二巻中書玉山亭
れ起源あり。絶世無文よ
うど。亀山こうてうとの
今絵とも。懐と述給ひし
なり。又東遊第六安樂寺別
當安楽僧都関東より来り。
久寿明後年起源とをぞ。

あり。是を物語ハあり。
又ハ義経の物語ハ正しく
詞と云ふ。清盛入道
叡山の言金流と云ふ物語
金流ハ。
よ。それども文云ハ。
又義経対頼朝ハ遠心
教経の起源と進とあれども。
其詞ハ。
春の守能換対平家物語
之由起源文ハ。最古有祇

文京經ふかくして好貞元
年平泰時式目をさだめ浮屠
流曲をうしなひ人倫を紀
とくりふぶ山あり西の紀行文に代
西行乃聖詞れ聖人とくべ
きなきを坂聖海布して紀
行文と月ろ多天暗山貞紀
乃紀行文と推とする。
日ゆい林ふ山ゆく。右山せ林
威坂ひろ多我胡の風俗に
ばしばひ和ハ林よまる

せくて平寺ラ之○靈祇紀行
ふ美い卒二遍れ東ふ文あり
位署書ふあしどして岩位
姓名不詳ろ多行り名長の
洛并石燈ふの新ふ紀行ハ
姓坂ふ不しふ氏とトにちべ。
ちくりろこうよも山海り。
紫ゆ丹乃ふ文字ふ彙紀の
字ふ注ふし乃んとうり
一他ふりとりふ本まろわれ
の物数ふ記ふ細字ふ正ふ

とふとと同しくさふらふべし
一 歌書草紙の外題をかくやう
の事。右筆ハ中にかくべし。上を除ハ
つねの書の外題のごとく端
にかくべし。東山殿御脇書よ
りミえたり
一 紙屋の紙といふハ。大内の紙
屋にてすきたる紙を云。源氏
物語にも見えたり。紙屋川
といふも此紙すきたる川也
一 檀紙といふハ。合のゑ也。源氏にみ
ちのく紙といふハ是也。陸奥よ
りいだしけるゆへ　埃嚢抄　[illegible]
一 将棊の王ハ。玉の字を書
ハ。両王いまさんことを忌て。必
一方を玉と書ことハ。[illegible]の故也
[illegible]に。埃嚢抄に出たり。礼記
にも。天無二日土無二王といへり
一 九条家にハ。[illegible]の事御留守
紙と[illegible]ず[illegible]色の
一 紙せ[illegible]いう[illegible]紙へ
ねかかく。[illegible]ハとふと[illegible]よ

是折くれり（此一條行有院）
一平出顕宗紀。平出とは
乃かくにあげくたんの行
頭と同位くらとこそ顕宗
い行の下ゝ一字ゝ分ゝ
げく平とこそ光帝。天皇。
皇帝。陛下。至尊。尊上。天皇。
天皇乃溢。太皇大后。皇大后。
皇后の類ハ皆平出。平出とハ
天皇 おうふ行の下ゝあげく
かくとこそ顕宗紀 初廷出

う一字さげくかくなり。
大社の供奉。太政官位姓名。
乃部陵号。詔書勅旨。宣化。
天皇。中宮。東宮。皇太子。
おとゝ。皇親。皇子。ゝ行れ上
ゆあゝりゝる所ハ顕宗紀のゝ
ゝ。平出すべし。ゝひろく
ゝ。平出すべき
ゝ共出代と称て
ゝ。平闕すべ
ゝ

又ハ地と母とを殺す
ものとなるべくなるハ。
人ものとさすなり。なほ平額すべ
かるべし。平額とハ平出額なり
乃二様とをぶ一深乃ものハ。
清海ハ令義解第七巻に
式令にやうりぶ式令に用ろ
ハ公方。将軍。大樹。帝。基。所
公方乃ハ又母ものとハ平生ろ
べし。上ものとハ故世嗣乃

ものなどの類字なるべし。
出家ものとも此例によるべ
きなり
一詔書。勅旨ハ同見編言之。他
偏ものれ大事ハ詔と云。弱者
乃小事を勅と云。令義解七巻
一梅花。和歌及和文ものとハ
れ花と梅花とハ中よの
字をくるハ。唯梅花と
かるべし。もしよハのく字をと
るくもめれ花とものとも

もかくのごとくちくのの字を
はけくるもべし。俗世も同し
一人のみと多くぞまこしくく。
ユツフを沢ヲわりちがくく
ニトと我ようそぐしろもお
それあるかりくぞまおユた
ヲ不同ニ云ふ同の字ようけ
ものごとけまでど昔より吹
のごくふりけりぞれ書り
おほ不決とうけるぞをとり
ゆらふ学問

一人のみよ廃みの字と行るも。
上代よいかし。中世よりおころ。
実自と殿とえとかり用くまず
ずもまぐ称するなるべし。
上代ハ孫の字と用くて中世
よもかくまぐ称るどえ初
ようおころくしまるぞのハ
おのごとさ世ようちぐまる。
但乗物ガ言ふ。賢酒ヲ
ちの物の陪今不というぞ。
何ようすぐふきる人よ称と孫

せてとりてこうりょうよい
今もこうぎへのかはしも成み
字をかさねつゝ伝ちゑよも
こゝ等は昔よりこはやうこう
ふへこうぎたるの方よし成
の字とかくとりてこうり伝こと
いちろれ伝法師をとまるべ
くこうちゑ家にあるこぎ
れどもづこうこうよりこと成
乃字とくへこれのこうり時
宜とこうざれどこへの飛笑

をまめられこうこう
一板家清花乃大臣大納言宰相
まこくへ五位ハ殿上人より板敷
ハ也但所宜より下侍家有事
ハ殿ハ殿ハ也殿ハ殿ハ也殿ハ殿ハ
侍より殿上人へ下ハ板敷ハ
板敷ハ六月日より二字さげ
く尚所と書る事ハ也
一双紙書様こゝ門開く紙乃
初より幸の宮頼れ之巻載
が法ハ一所巻紙乃たより

出初ある通ばかと又云奇
書ハ本よりかく唯乃双紙ハ
紙の右肩ハ初より考れ有説
一冊書初額のかきはじめハ乃
句一字下て書紙ハ有時ハ
よりの句同しく寄りよりて生
作者ハ名案のト一字かどわく
べし又一冊ハ書奇ハ数多さ
時ハ紙を書く奇ハとれ句
乃ハ同しく寄りよりてべし紙ハ
さ時ハたんれとくとれ句一字さ

げく行首し考べし 往有説

書礼口訣上

書法口訣中

二 貴賤書法

一受領の官遷れば名を書
るゝ貴賤の也。我身よりは出
べゝ。

一上軍人の中なる所にて氏
隙くべし

一連署は何先の面なれば。文り
をく日付をきと書べし。
まおい面なる近き所上とす。
おとゝとは父とすべし

とうしたをくとうとも。向の人
多かるべしとうず。此ひとの
名は前ハト官後ハどと上なり。
人数の多かるべしとうじ。
なるべし。○九月付のトより判
もろ人とトなるとも。日付の
トハ第一の初よりくゝ人ゆり。第
名のみなるべし。但筆先上なる
もろべかりけるべし。連判ハ上り
連判ハ奥よりなり
但紙数多し何も後云

二月十日

上 何某殿　　中 何某殿　　下 何某殿

中 何某　　上 何某

下 何某殿

高石或ハ三四人以上同
連判も二人以上なれども三
四人以上なれども苦しからず

一封皮の面ハ
面ハ二人の時も同。三人以
上も同。一枚ゆ上ハ面何
面人のみを書よ。前ゆり枝上
つまり

上 何某様　　上 何系

中 何某様　　中 何系

下 何某様　　下 何系

一面面々之書れ方紙之通り

為二五位一

進上

何某様之書報　　名系

上官 何某様之使者　　姓名

同家 何某様之陪従　　表ニ 姓名

何某様之使者　　表ニ 姓名

何某様之使者　　太閤

何某様方ヘ

何某様方ヘ　　行ヘ

一恐惶謹言　　二 恐惶謹言

三 恐惶謹言　　四 恐惶謹言

五 恐惶謹言　　反之の様にて書く

一封ヘ　　夕 小キヲ上ヘ　　ヘ 中二下ニ

夕中　　メ下

一捻文之封目　　上中下

メ 雑様　　名系

メ 雑様　　名系

〆 御礼　　名乘
紙長く封目ありて宛所
さがりて下書也

一上　某誠恐謹言
某頓首誠恐誠惶謹言
右ハ極之殺也　但此二ハ今世不用 于武家ニ

中　恐惶謹言　　恐惶謹言
恐惶謹言

下　恐々謹言　　恐々謹言と書
之ハ其ほと大体ハ [illegible]

恐々謹言　　恐々謹言

恐々謹言　　恐々謹言
恐々謹言　　謹言
謹言

一 脇付上中下之次第

一　机下　　執事

二　下坊の人ハ恐惶謹言
　　まゐる　御中

三　恐惶謹言
　　まゐる　御中

四　恐惶謹言
　　御宿所
　　但宛所ハ [illegible]

五　恐々謹言
　　又ハ宿所ニ [illegible]

六 [illegible]

七 [illegible]付書 [illegible]

[illegible]

[illegible]

八 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一 [illegible]乱の時相[illegible]

[illegible]

一 [illegible]

二 [illegible]

三 [illegible]

四 [illegible]

五 [illegible]

六 [illegible]

七 [illegible]付書

八 [illegible]

一 女中[illegible]脇付[illegible]事

一 [illegible]

二 [illegible]

三 [illegible]

四 [illegible]

又ら

右之〻れけも以ていぢ行こと

うけ相綱也

一無じて拍子ゝく是と深る

る事形也

一上不の〻進上とと〻ゝ接上

ぢ〻ゝ灌上ハ又ゝ沼ゝ右ハ肩

出ふとゝ下ゝ通じて注上と云。

但真言行ゝゝ〻ゝ拍あ

べゝ

一拝上　拝進　拝献　拝呈

弾指　寺院院号之上ゝ学ゝ　弾像　死れ

右ゝ誹之動也

凡上而ゝ拝上ゝ〻この動と云

弘安礼節ゝ旨かくれぐゝ。但

武家ゝハ〻ゝ指指と上ゝと

口ゝ

一殿ゝ〻ゝ大仏宮法ゝ〻べゝ

殿　殿　殿　ゝ〻ゝれと云

下ゝ〻ゝ用ゝ

ゝく　ゝ〻ハ不ゝ

一返書ゝれ脇付

回礼　ゝ〻ゝ〻ゝト指指

共ゝ用ゝ　回章

回礼　回報　回鞭　回答

此之類之右真草行くく
上中下れ不易るを書れて
より真の宿所へくく行くく
くくくどくく有分別也

一来書上中下乃ゝ
御書　礼之　書
上也
貴礼　礼を上也　礼れ
御恵礼　礼れうハ行下二段
御恵書　礼れ
1回

御状　礼を上也
用之

一向れ久家と古くゝみ
家を称くくハ武家くくう
やまひくくゝ家を称ハ礼也
ゝ久乃古ハ上中下くゝ

上　十月十九日
雑賀殿　尼賞號也

中　十月十九日
雑賀殿　尼ハ号字

下　十月十九日
雑賀殿　尼ハさげくく

一九月日ハ書ようの一字をさげ
くさべし。或ハ字もくくさべ
とゝ況あり
一同宛ての乃ち名ハ
三好筑前守殿　貞元　来河西紙　福田左馬之丞
一山書紙とうち付ゝとゝ。ぐうよ
もさげくる仕也。ヒダン二シホド　紙数人程ハ紙
数度紙ハ百ち度　裏付ハ長慶
一名字を漉き官ぐりゝハ敬之。

官ぐりゝハ敬也。行ヰ礼の格敬也
メ河州様　来ハ中　名案
ヰ礼の格敬也
メ河内守様　来ハ中　名案
ヰ礼ハ官ぐりゝハ敬
一ま一署し附。状乃素ハ山ハ名
ゝくく表ハ名案ゝ山ハ
表ハ名案と云ハ下中上と次
ずしく。素ハ名字官と上中
下と次ずべし
一尼接状法状共ハ封目ハ表ハ

乃こゝ分べし。物ゝ分は裏に分べ
一鷹は目縁は玄ゐは兄鶴と先
し。鶴とはゝとこのゝとは兄
鷹も雄なり。鶴は者鷹也
時也。鷹はせうは男こだいは女
一樂器は。絃とばせんと。管
鼓とはゝとこゝとんとかれは。絃
は堂と乃系なり。笛鼓は堂下
乃系。絃とは琵琶箏和琴
かゝとゝ。管は笙篳篥笛
とゝ。鼓、太鼓鞨鼓紙鼓と云

三墨縄之事
一墨縄こゝ。五文ちゝは二ゐ目
れ中程かゝ上へとくけぐし。次は
三ゐ目乃中程より下へそつぐ
べし。それより後はふぐひちぐひ
よつぐべし。きゝ乃ふこゝ和文
章れなこゝ。ふゝとくけぐし。
行四しゝ上へ拍子とくけぐし。
かゝぐとゝつ。ゐれかゝ上を
つぐど。位こゝ乃ゝ上乃ゝ
きこゝ。ゐかゝぐとゝ。又一流

ゆゑ乃二字は用ひず一字用ゐて
たゞ〳〵ゝゞ。凡丁継ぎ
丁継ぎ方そこの所
ゆゑくゑゝ河ハよろし
墨ゝく丁ぎ
なし復ゆゑくゝ河ハ墨と改
ゝくゝ書ゝ又物乃内人の
名多く出河ハ段人ゆゑ墨
法ゝゞ。當ゆゑ
出下しゝゝ墨ゝゝゞ
二人三人ゝゝ。ゝ内の

部ゆゑ人ゆゑ墨ゝゝ出
也。ゝ人のゆゑ墨ゝゝ
継乃ゆゑゝゞゝ墨
法ゝの礼なり
一當ゝ墨法ゝゝ。ゝくゝすゝ
ゝふたゞゞ。墨次乃並び
いゝゆゝふ丁ゝの部也
一人ゝ名ゝゝゝく墨ゝ。假
今ハ四書ゝ書ゝゝゞ
ゝゝく継ゞ
一たゞゝゝゝく墨

継ぐべきぞ。人乃名。物の名。和
乃名。神社寺院の号。定た
右。昨日。今日。明日。方。明馬。月日。
数の字は都也
一旅客。文章。字。所でふ也
げく墨と継ぎ。文字。図
所。れ。ぬ。同じ。番帳。られ。人の
自。くあるは。墨継ぎを
づく墨こく下さを
一作と云字は。真っ黒。ぬ
る出切り。貴族。げく出。

ぬ。べきぞ。乃。也。凡作と云字は
乃どとうぞ。と云は墨継ぐ
らど
一行乃最下。くつぎ。乃
はくく。継ぐ。乃の最
一字はくく墨と没ろと。最
第一字づりとく二字
墨と没ろと。二つをきく也
又貴人。或貴族の人乃名
らば墨はかつどづれ乃
くも継ぐ

一恐惶謹言と書面に続けて
三行ほどに書れわりくに中下
の系わりを也書様の文言は出
人れ作言は牙也。以三行を
墨と没ちが致さるる
一続けてまくに墨と不没は続け
おこと程のもの
一紙ほどまくに墨と没るも不
没もかりてを
一日付は書れすきこきか
ちらず

一之面方書様は也こめ
の様に墨不継
程はあはもなくしく
一書様の行の形へあげくる
書字。作之也事をくみ
かまへ。ふ
一つのれろれ和もくへ
ちくに行のくに出べくば。
はあも新とそて寸記。
の下は不字字点も大あり。
ほとこわ系をたたな

を用ゐれば　とかはれも
数をもつて可知といふ
一行目の内に書こく行と云の
八の十の偶数より出る
書くみを行の始まるこれ
詠り字れ数加れば詞と忌こ
一帯状よい　延るもきべりしど。
これ行を始め　詞
事ゐ　数ちゐ　延くかれ
を詞　平出之書法
七行の九行の行も行ぬと言

は言べし
一題ゐ一行書　筆と下
深也　但書人ゐ　人名ハ人
の字行ゐ　ゐ　ばつづまの
下ゐくも　書と下深ゐど
のゐをばよりゐ　ゐ下
ゐ也　犯人名の儀も同おなじ
漢ゐ一句　句切ゐ　行
小書を深べし
四用字事
一書ゐ一書ゐ　人名ゐ書

中ほ一つ出るべし。付いたべし。一つ
出さいたいよい平出一まと
まべし。○と業は説抜りくろ
ものなべし。一まと書し一まを
聖書すべし。一まくは一つがさ
くろものよいわくど
一乃字とたふ。まこの字乃
くけ程さげくたすも。並
まくいたづくど
一ほいまくいへ乃物ほ夢よわ
乃字久ほ。ほらびくろ久祈れ

ヒ出さ意外也極そまたづくば
ほ云こくたべし
一級位ほりふ平出たくくも
ほこの形也此外ハ勿論ご程か
ふほ平出しくて部字ほりう。
それハくくしくばほくどぶき
字いりふほたべし。ホのえ約
乃名若れほたまくふも須
がくれまいりふほたべし
一進上たくく事。主人まく人昨
通又伯叔又ほ人ふ。ほ極尊敬

よ丁云仮名人へハ進と乃
字ハ行こそ坂ハ進と云ハ五
れ也也じくくるくよ不別
しくく丁数人よハ三ケ所人の
名を云べし。進と乃くれ中と
ハ乃ハ拔ものハ拔の数こ
一奉と云字ハ乃四よ多く云
べしと。車れ行ふりく二ツ
まぐくハくるしくぐろる也。
平人へハさらくくろくぐろ
字こ。笠ハよハ不書こ

一ハ乃四よ一ツ云し事ハ三ケ所
おくハ不書こ一ハ一二所
くくも不苦仮四より上偶と
ときくふなり
一ハ乃奥ふ流ふ乃ハ所
ぐくくくと行くくくと云。
不苦ハ乃ハ拔云よ乃くくく
くくの字ハ乃ハ乃ハ乃ハ
へハくべくくぐど
一也の字ハ行ハくくくろくく人
よ不苦同字ハ乃ハくべし

一号令人乃字ヨリ御の字ヲ用ゐ
ざるべ
一御の字用ゐ[illegible]て猥
用ゐべからざる。我ヲ御乃
字ヲ用ゐべからざる
一書中不平文言之
事方ヲ[illegible]ヨリ出ル事ヲ
沙汰シ[illegible]ん ゆゑんなる事ヲ上
申ス出ん 出ん[illegible]
音ヲ沙の字
かくべからず
の字ヲ用ゐ
べからず出申ニ[illegible]

以仁ヲ地名形ヲ[illegible]
生屠 生鯛ヨリ生乃字ヲ
ヨミ塩屠塩鯛ヨリ塩の
字ヲ用ゐべし
一俸 合せくいへばとろ云也。
俸ヲ云云ヨリ[illegible]
出べからざる。[illegible]
俸ヲ仕合員[illegible]
勤ルとねがふ[illegible]
一禁制と制札と差別ること。
護人なるべ禁制と[illegible]

後代ならば割れとさくよう
一定とハ物の分くゝと合とく出
もを也。捻とハたゝト酒土れ割はと
お字ハ方ゝとさゝ。れの法ふ
ハ云べゝゝど。字ハとハ法度の例
ふれ分号と字ゝく出分る
る也
一公の字。三云の字とかりく次
下ゝも云下様れ人ゝゝ
稼すゝゝど。古ハ殿文字れ准
據なり

一的侯ゝゝの字ゝ日の内ゝ
お届ハ不弦い一あるれるよい
ちくもゝ知ゝ。日数と知ゝ
ハよハ出まゝ知ゝといゝ。色か
いろ法也。的の字ゝまゝよむ
ゆへゝうふゝる所るべし。的侯
ハたゝうかゝとも也日とゝ
ゝもゝうゝる侯よハちべ
一作と云字。行の字ふ出まゝ
ゝ也。作ゝゝ云ゝとゝ
ゝの下ハ字ゝきゝゝハ不苦

一和歌人より殿文を低くみよ也
べし。よひと云字をあくいろま
しくひ。今時いひはやるとちぐ
らどもを紙に書て紙ぶくみ時宜よ
ろしき人へ進ぜと云人涼
しきべし。ゆるす時よきべし
一世と云面ふけせ乃字上ぜこい
下なり
一角ぢれ乃れ。耳をきこび
さるつぐき字を文章不可書
江戸美字とちべしべ。等閑
いとよもちべしべ。仮名を
人も文字をまろ人かろ
べしべどもれも美字とちの
いあしく美とぬこかざりどこ
乃むい濃酒の人れをぐこ
一庵下 左下 左右三りい。
ををこと云ちいよりい文
は宿ぶちりハトの人れ高
べし。凡下い書れ三ウよりかと
べし。古宿ぶ同ぶ也。ぶトい
猪ぶる言既也。ぶトと有

まじくん

一ゑん人きん人(つれ出れよ玄冥
かゝるの不平玄冥から仕
合冥から出いよう

一ハ熱動ゑ出迷惑ゑ玄冥
を玄ハ熱熱ゑ出ゑねい痛
入ん和ゑう

一落れ一字目ハ内問伝すて
ゑぐりよゑとつゝゞ。東拝
すゞゑる也玄冥ハいよう。法ハ
いつゞ他ゑき双紙物語ゑ

よもまうのゞゑるゑくハか
けゑ

一男れゑ物ようゑに今れ字不
行書女乃ふゑよゑ

一法上ゑゑゑ代まで法上
乃真行草小殿の真行草
書い。織田信長ゑれ所以業績ゑ
ゑ不書い。法共ゑゑ所も法上ゑ
殿ゑゑの引ゑゑ。通所ゑ
ゑく迷くハゑゑ。只物と書
ゑ世引れゑゑ不良造物

文正乃末より寛弘安乃礼式
も断絶せり。今も式正の
作よい人よりの不よう作上
手をつくべし
一真れこと作言ハ拙者ハ用
之通用よハ無之
一或乃字ニ付より初上ハ男ハ二ツハ
不用といろたくハ或ハ日或ハ
四日ハ乃の部也。今年中華
乃書とハ乃字ハ或乃字ハ一ツ
ハ用ひる例多し。作きハ二ツ

ゝりハ上ハ男ハ乃字信
一拙者ハ恐惶謹をとうけが。
当れよりなること
一宛賞と云ハ器物ハ人ハ
多くたしハ代ハ安き
方ハ人ハ代ハ
一云中ハ多くすて作ハ
ハ。二ツ二ツの数不一云
一吾湯とハ人ハ。へうへと云
とひろ云ハ
一多ハ人ハ。へ物ハ作ス

偽りをはめしの事。但無ひら
ふよかく内かうしかとまじ
えてくちべうしず
一うぶぎのみをなれば。老
衣とちくうし
一進止とちの古きみ言なり。
員永乃式目よりもあり。裏な
賣券をいやしき者は文
もあり。ぞるまえれ人乃みよは
文あり。ぞ代よりなき文言
なり。名ぶ沼弟ちとうもり。

所自由ふくよまうする言。
なりもとしれ書よりう。
取進止とあり。ぞ偽乃裁判
とうくろ言
一庭丁乃賢斗蛇ぬ乃れ字
蛇のもとはくちべし。ぬ
れるべし。庭丁賢斗と
ちべうし
一他しりとろわと。葛ら掛と玄
示ねとかくいみ字ふべし
く分ぬうしぞ無ぞこと

下ゑねんとちがへ

一市中よりあれ物めいとちがひ。
御ゐ[illegible]きてこしぶ。物とハ拾物
ゐ[illegible]ぶ市めいゑ[illegible]
めいとちがへ。他とてういあれ
悔とうけたり。やうれあやまりゑ
私より没りくうしゑ人ゐた
りあり

五書式圖

一山綱でう拾落物ぶ[illegible]ふも極
ての[illegible]のゑ人へれ何ぶ[illegible]
べし。拾落物とハうちなれ[illegible]
くそべ付[illegible]ぶ人へ[illegible]
ちあり

秋庭備中守殿　長勝

一[illegible]ハ[illegible]れくゐかきれ[illegible]
なり圖ゐぶくゐ[illegible]と丁[illegible]

松尾信濃守

大膳大夫殿　長元

山河ハ[illegible]ぶ[illegible]
とうぶ

一竟も者をもつて御極めこれ
仏者より八幡宮まで
御ぐけくんをもつてつぐ

松尾信濃守

宮右衛門殿　長元

一進覧書ぬけ　已上宝乃
御極め　已上宝乃
御極め　已上宝乃

原左馬助

一色丹後守殿　貞信

一四宿所書乃次第ぬけ　已上
同宝乃　御極めなり

伊勢兵部大輔殿　貞信

上野氏部大輔殿

上野氏部大輔殿　長元

一上宝乃　宝乃　乃ぬけ
添付くくと　紙の　賞状

松尾信濃守

大脇宝殿　長元

一同宝乃　乃ぬけ
三好筑前守殿　長元

松田左馬宝

一はしをうち付さしぶつに
もさげしろ物ぶ被及行のこと

うち付さこと

安永五年ちの分　長慶

一はしをうち付れ貝緒ぶ至人まで人
へ乃須後ぶ等業の河ぶ上
も実ぶしてさこと網網ぶ敷
ことこと網ぶ入てろ物ぶ幾桶
と出ぶ掛ろ河ぶ看落書
流ぶ掛ぶと出ぶ魚ろだ
ろをよろ河ぶろと生まと

と朝鮮ぶ魚と奥ぶ出
網長乃河ぶ網を和ぶ不好ぶ但
昆布ぶ流ぶ魚ろれ中
ぶ出ぶ袖ぶと添ぶ物れ
おぶ出べし
一はぶ綿糸ぶ丁ぶ
乃れ貝緒ぶ出河ぶ代のやすき
和と初ぶ出りのけりとそり

進上
白鳥
居

一羽
一羽

鯛　一折
鱈　一折
海月　三桶
以上

一色左衆変
宗炎

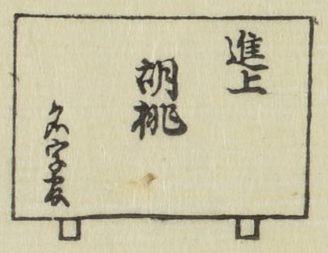
鯛の事日なれ物乃作りまこと
なまい
大日無之

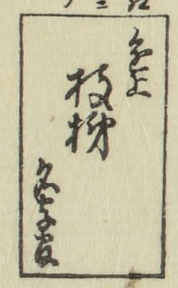
一料紙之上ろ〻。大形つ寸六分
ろ〻えすまぐ乃料紙よハ上三分
ま程ふ寸と立くト三分ま程
上ろ〻之ハ
一折紙ハ武家方之ハ
袋綴紙三す六分五くハ

月日ろ乃三寸六分。
月日ろ乃面かまぐ三す六分。
上ハ寸ふ寸之ハ物上よ存ハ月
日ろ乃面かまぐ二す八分にも
寸之ハ上つめそれ紙ハ
かゝ〻ハ上ハ紙二す八分より在
ろ〻めろまぐきこ
一上ハ之端上ハ〻。昔ハ上ト寸ふ
掛ケ〻ハ上ハ〻。ろハ心安
方へ上ハのいろくそ法し
ろ〻ろ有之ハ。追ろ上ハ〻する

ゆしまるとこそ。たゝ板乃河めぐ
成近乃れくゝ乃ゝ。くゝ。殺
端乃三寸六分れ面よ二行歩
くゝ出乃ゝまぐゝ。ゝ有
ゝ。とゝくゝ。面河ハ善惡サフ
出ゝゝ称ハ不計板ゝゝべゝ
ゝ。古ゝふゝ小ハ不見ゝ。
今吹ゝゝゝ。ゝ強紙ゝ式ゝ
ハゝゝゝ。
一撥文結文ハ奥乃打板ゝ結
ゝ。一す八分墨くゝ打初ゝ。

下字ハ沈者ゝ廣くゝ
一足ゝ名ハふゝ乃背。横
板小出ゝ





六名称

一天ゝ仏洞ゝ御ゝ

物ハ宸筆　宸翰　勅筆
或ハ云御の字を下ニ付ル
宮門跡乃文字をバ御筆と云。
平人のをバ手跡と云。正真を
真筆又ハ真跡と云。似セ物を
バ偽書とも贋書とも云
一むかし足利家の方より出ス
殿下御書をバ御内書と云。
表向より類ハ摂家ハ。老中之奉
出すり御内書ハ内證より
殿室心まゝゆへ御書と

云義也。又御内書御教書ハ
洞ニかゝり有之御内書ハ
備中引合一重ニ書之て封
も常れでく脉御判ありけれ
教書ハ杉原一ねに書之く
上封表包と只雅ゆく墨
と示引又御内書ハ月日ばかり
なり。御教書ハ年号月日とも
つきく出之。御教書もくハ
管領乃旨と云。奉書もくハ奉
行の旨と云。又御下知若ハ…の

あまりこれなる称今はかゝれど
とくなるべし
一武家とくらゐ沢みゆゑと云へ。
禁中ゆて奏聞と云故奏
乃字と思わくらゐ沢と云く。
ほとゝとく奏者と云る
大なるひがこと也
一摂家みな伏見殿かとと所
所と云つき也
一親王家へ伏見殿八条殿也。
まゝ勅旨と所はいまゝよると

帝位と嗣絶ゆゝ猶繁記
ゆゝ
一御家門へ摂家流と云。
俗よも称すゝ
一禁中ゆ殿上侍と滝口と
云。院乃侍と小面と云。東宮
れ侍を常乃と云
一ゆゝれ作と勅と云勅諚と云
詔と云。御書と宸翰と云
親王宮后乃作と令旨と云
一称号ハ氏也。今れ位也と云

字とゝ。細川と名るゝの事を
云傳るいにしへ。伊勢氏
かゝゝ。かりそめ。遠ハ百官
實名ハ名字也。受領ハ国名。家ハ
也。受領ハ国名。家ハ
字と稱号とゝ。名字と名
字とゝ。武家ハ氏を稱
号とゝ。名字と名のりゝゝ
べし。姓氏とゝ。ゝゝハ
ゝり也

一法王とゝ。一世二世といへども

まゝ勅を宣下なくしてみずから
と名のるゝを
一法皇ハ。宣位ゝ下初位已上ゝゝ
一勅宣とハ。凡の詔とゝ詔勅
文の名目よいあゝゝ
一口宣とハ。職事奉ゝゝゝ
すゝとゝ。内記書之
一宣命ハ詔書よりゝ中
祝の文ゝゝ
一朝ハ。ゝゝ。位署書ゝ
一位署とハ。ゝゝ

云連ねと云

一公卿とは。位は三位以上なり参議以上を云。殿上人とは殿以下堂上の人を云。月卿雲客は公卿也。雲客は殿上人也。三位以上乃人を上臈と云。参議とは宰相の事

一三位以上は四位参上乃人は公卿に成れ下は卿と付。四位参上乃人は殿上に成れ下は侍と称

一名字とは不審。居所とは

御。日野。勧修寺。三条。油小路。

あとの野と云家は名を称号と云 判と判

形なり

一所服とは。所々を温ね道

より服と云。名は小袖なり

はかまは。袴の如く袴乃事は裕

と云。かろうして書ふも時服

と称

一我主君は。徳乃人を対

して云。主君は人寡君なり

えぼし。檀那とは三ぐりぼし

る也檀那とハ僧よ財を施主なるをあやまりて。
ゑ武家共よ物をもつ
あやまり。僧よもつぶべ
ぶ。人ともぬうく正
うふもつぶべ。それよりう
くあやまりとぬひ
かし
一奢れるとハ紙也。あへ奢
乃屠奢れ色なるを云。花とハ
榊ごとあハ桃花特花

かとを云
一鞍づくりハくつがねと云。道具
仕色をとバ皆具と云
七名数
一三色とハ胸色面色尻色也
一参而よハ七和二七和と云べし。
一七日二七日と云べ。亡者
ハ一七日二七日三七日なと云茶
とのしふ七日と一週と云。二
七日と二週と云。湯治も同し
七日ごとふ茶かめぐるなるべし

一小太刀ハ一振と云べし　大分
ちさき太刀ハ一振と云
一小袖二と一重と云　衣ハ一
おりくをかりうちと一襲
と云　ふくろへいれをねあひ
と云　ふくろ通し一領と云

衣一襲　一領　鎧一領　冑一頭　敵二八一例
太刀一振　一柄　一口　一腰　筆一管　一枝　墨一挺　一筋
紙一張　一葉　硯一面　机一脚　弓一張
矢一具　一隻　弾一具　一指　弦一筋　又一張　一桶　一張と八七筋之一箱と
八二十八筋　鐵炮一挺　一口　一門　鎗一挺　一口　一本　鞍一口　一背

鐙一掛　一足　銜一口　障泥一掛　一指　刀革一具
手綱一具　鍬一口　琵琶一面　箏一張
鐘一口　鞠一足　鼓一丁　太鼓一掛
笛一管　折一合　鮭一尺　鯉一本
鷹一聯　一連　馬一疋　鳥一羽　一頭
魚一喉　一尾　一丙　鏡一面
一言葉と加ル物　くたいたすき
たすきとハ　ワリ不出　疋ハ　疋ハ　ワリ不出　疋ハ　疋ハ　ワリ不出　鬢付蛇の
不出　呉服　呉服ハ方ニ　五方ニ寸也　帷服　帷服ハ　丁書
一狩と　鹿狩　鹿狩ハ　鹿
狩汀　猟　猟ハ　書稿中

書籍口訣下

八神紙

一鰐口乃紙書様

奉掛鰐口之緒

三嶋大明神　廣前為諸願成就也

年号　月日　名字　官氏　姓

一戸帳之書様

奉掛御戸帳

三嶋大明神　廣前

年号　月日　三好越中守平政久

一滝之落書様

奉寄進鳧鐘一口 又本ヶ浦ハ供僧と云べし

熱田大明神 廣前

年号 月日 [illegible]

一石燈籠之付 [illegible]

奉寄進 又獻上 石燈臺 一基

春日大明神 廣前

年号 月日

一繪馬之付之事

年号 月日 三好越中守平朝臣敬

奉掲繪馬一扁 畫工何其

住吉大明神 廣前

一靈社之起請文之事

敬白 諸靈社

奉請上梵天帝釋四大天王日月

星辰下堅牢地祇五道冥官泰

山府君殊者日域之本主天照

内外兩宮熊野權現三所別而王

城之鎮守賀茂上下祇園北野稲

荷愛宕貴布祢大原野梅宮松尾

平野并諸國靈神八幡春日住吉

日吉立田廣田大峯葛城丹生日

前彦山氣比嚴嶋立山白山藏王羽
黑關東守護神伊豆箱根富士淺
間日光鹿嶋并生國氏神某社懲而日
本國中六十餘州大小神祇白言若所
載于前書之旨趣於構毛頭詐偽者
相蒙所奉請之神罰於此身現匪
啓失弓箭之冥加受白癩黑癩重
疾而永絶人倫之交來匪翅墜阿鼻
之奥底逼牛頭馬頭之所呵責而再無
浮出之期必矣仍霊社罰文如件

年号月日　　姓名判

梵天帝釋四大天王等神道歌不用也
冥祇諸天神地祇諸神從俗間歌書而存之
而已

一願書出紙之事

右願者國家安全武運長久息災
延命為祈念也延者神者依人之
敬增威人者依神之加護添運因
茲奉仰諸願成就狀如件

一拙紙前書條数事大抵三ケ
條の法之ゆゑり云へ不苦但ケ條
多きは二ケ条に限るべしなり。
五ケ條数を書よ之べし。拙紙

かぎ〳〵ど、一つゝ去ハ也してまろ
出乃中なり
一牛王つぎたる。牛王ハ上ゝ者
出の紙ハトヽなる物ゝつゞく。
常代ゝ者ゝ
小者いやしき工商百姓等ハ重
社乃誓紙と申。士ハ五社不
出由也。お納りり。但所位ゝ可
一正遷宮〳〵ハ社を新造ゝ
て神と称し申ゝ。假遷宮と
ハ社再興〳〵初假殿ゝ神と

とゝ申ゝ也

九 官位

一初主乃御時代君行政ゝ摂政御
元服の後事とあづりゝ関白と
も。摂政忠仁と始ゝ。実
昭宣と如〳〵也。
神功皇后も仲哀崩ゝ後
後ハ摂政〳〵帝王ゝハ
相古乃御時廃戸ゝ皇子摂政。
荷明の御時ゝ中大兄ゝ
摂政〳〵

一或書に曰摂家大臣の子ハ。初
官中将少将に任ず。其以下家
ハ初而侍従に任ずるよし去りしさ
るもろんべし。摂家ハ元服の後
かならず任じ、拝日の後侍従なく中
将に任ず。清花ハ又若くして五
位に任じ元服の後ほか中将に
任ず

一元服して初て五位となる叙
爵と云

一昇進の次第侍従よりかなる
宰相也（是羽林家の昇進の次第也）侍従辨宰
相（是名家の昇進の次第也）頭ハ中将辨共に
ならばいらざるべし。参議も
なお。武家昇進ハ羽林家
の次第也（なすことあり）

一諸大夫にハ叙とも云。不謂任叙
におあらざるなれ。叙爵と云
任叙と云。位にハ叙とも云叙
ニハ任とも云

一諸大夫ハ正従四五位上下也。従
四位に叙せるを四品の諸大夫

とゝ。尼五位ゝくも宣旨
も侍ぬるゝ。ざるゝ法皇
不殿堂上ぬれども武家宣旨
なる人名為侍所。公家ゝ侍所
殿堂上ゝ。尼法皇ゝ元号五
位ゝ為。侍所ゝなるゝ
なりゝゝ 法皇のゝれ有院
一左近衛大将云官。左近将監ゝ
ゝ侍りゝ法皇ゝ叙し
ゝゝゝ人のゝ
ゝ也 東寺物語書

一官ゝくして。後五位ゝ叙ゝる
ゝ。大納言 同上
一正大納言。大臣ゝ行ゝ
人大臣と。時ゝ
ゝゝ人ゝ正大納言ゝ
代ゝ行ゝ。坂路権大
納言也
一散位ゝ位階ゝゝゝ
ゝゝ前大納言ゝ納
言ゝ散官也
一権官。ゝゝ也。正官ゝ

らゞ。正女の外ハ男女ゝ重
と雑女ゝゝ
一外記官務等。凡堂上せざる
人を地下ゝゝ
一叙留ゝハ別なふ位ゝゝゝゝ
も舊女元乃ごゝゝゝゝ
大内元ゝの松なり
一戸ゝゝゝ外ゝあり。坊戸
ゝ人連宿称ゝゝ二十四ふ
ゝゝ。ゝゝふゝゝゝ。氏ゝゝゝず。
女ゝゝゝゝゝゝ。

常盤連 武内宿禰 吉備ノ二人
ゝの松也。ゝゝゝゝゝ戸ゝゝ
ゝ
一題十二等ゝゝゝ。唐ゝも日ゝ
ゝゝゝゝゝ人日ゝゝゝ紙
ゝゝゝゝゝ功ゝゝゝゝ。一等
ゝゝ十二等ゝゝゝ。一等ハ正
三位。二等ハ従三位也。十二等ハ
従八位也
十 疾病死喪
一病人ハ半ゝゝゝゝ衣食ゝ

太よい呂葉をこく可笑そうふ
西表かくこと字をくいまと
継べうず
一串柿朱ろよい即けてよたてすす
ぐ〳〵どぼとれたるのはうべ。
絵たをあるより仕方を拵な
と為る可いたるの即けてな
くくいを計すすの勿論くたれと
叮いを絡こくこ付ると断云
すべきも
一串柿よい封目よ呂葉とあり鶴

舎の人へ半柿同
一串柿乃色ろよ編付進覧中
覚ると一番くぼ結ると
金不平鼻之
一天よれ御悩と出違例とい。
ムかの出病気と出不例云
一忌日とろうつきと云ぷ高
月山字よう。或祥月と用ひ。
大祥小祥の名ぷ高月も
可也
一死去云 天子ハ崩御云。

后も同。若宮殿を云ふ。
薨御。或云若宮ハ御陵。親王宮
白攝政女御。後冷泉院の女后
は薨逝。つゝしんで云方は他界と
云。近古は薨御と云。殿上人家
法皇法大臣は逝去と云。ハ
の平人は卒。
遷化と云。庶民は死去自死は自
害自殺。人を押付て殺と曰
生害。おのれ死すると曰相果て
とゝて殺上曰弑

一帝御を遷らせたてまつる事を
ゆゝしく申ならはせる。
ゆゝしく悪事。
或九月九日崩と書よ云
十一 僧家
一僧家は侍者は中ハ武家の人と
は中を同しく
一天台真言禅宗の寺号院
号は同者中
一院号は殿堂と同。
故に院号ハ殿堂まで

さとゝ〻ぐ。所ゝ家へハ廣ゝ家
丁寧ゝ也
一日蓮宗ゝ〻の大抵天台ゝ言ふ
同し。ち号。法号ハ日蓮中ハ法中
一社僧ハ其社其院ハ房
一座敷ハ。接待へハ接待ハ房と
有べし。脇付 侍者ハ中 侍衆ハ中
一浄土宗 脇付 侍者ハ中 侍衆ハ中
一寺院坊号ハ花書ゝ〻ハ寺
孤ゝ中ゝハ僧ハ和尚上人へも
拍子ハ軒 庵 斎号ゝ〻拍

ゝ〻ぐゝ。但宜ゝ〻ゝ
一俗家へハ者 山ゝ花書 流乃
中ゝも拍敬ゝ

原左馬助

拜上光源院様 侍者御中 貞信

又ハ ゝと ゝ系の字ゝハ
ゝ〻ゝふ 御
又ハ献ゝ ゝ〻ゝ侍衆
或御下ゝ ゝ〻ゝ
ゝかゝし。ゝ上拜進ゝ献ゝ
ゝ〻し。ゝ付ゝ者下ゝ

さらハれと申し。仏をもうやま
ひなるべし

一首座の中まそも長老同前の
者有べ。べ。何ハ侍者中勿論
又侍者衆中とおくてそる座下
五座下も勿論也。机下ハ次こ。又
糸ゐる座下ハ出家敬勿論
一雲水へ対する組かくのごとき法
外出家敬なり

真光寺 糸屋宮宿中 貞信

東方馬明

一是も賞説也。是ハ法ゆう法と
実相寺 内坊中 貞信

東方馬明

一或書曰 僧正 法務 律師 已
第ハ官也 法印 法眼 法橋 已ハ
ハ位なり
一侍官なと。なくくなとよりて。
自然ハ官とと。ゝ。侍業
ゆえんとすべし。他と称
しるるハんととすべ。侍業法
京ゆえなるべし

一門跡くぐり　宮門跡也　五方門跡
これ　摂家門跡清花門跡又摂清
ある　ぐるとも世俗ふ摂門跡と云
子出家し給へば法親王と号す
門跡門跡乃宮と号し法親王と
つ初まる　宮門跡よい寺よりう
大伝正まぐ　真言
摂門跡い天伝西まぐ　真言
京まぐ　真言
一仁和寺　宮門跡也宮多天皇
御原居ふつより初まる門跡
と云るも是よりんでまる

一大覚寺　ほうゐ院御原居也。
是を初とする。本書ぬもちを略く
持法ふ天門跡
一随心院　摂家門跡也世俗よハふ
天と云是も乃長者とり
ろく移り行れも摂家ぶ。
れハ
一勧修寺　清花門跡也是も
ちの乃長者とかろく移り今ハ
天門跡
一三宝院　摂家門跡也ほうゐ

れれ附。覆蔵伝。役乃小角法を
進く逆峯とふとゝけしより。
高山伏の祖。聖護院殿
天台宗ゝゝ。三宗兼帯
本ハ真言宗ゝゝ高山ゝゝ。
西門主修験頭ゝ
一圓融院　天門法也。梶井殿ゝ。
小原の宮と号ゝ。叡山之
主ゝ
一青蓮院　天門法也叡山之
座主也

一妙法院　同　右比叡山之三門法
ゝゝ　三不共ハ天台也
凡座主ゝゝ。淳和天皇天
長元年十月ゝ。伝教大師ゝ義真
ゝ座主ゝ貫首ゝ也。
一曼殊院　天門法。竹内門跡
法ゝゝ竹内門法ゝ也
一輪王寺　日光御門跡。天門法ゝ
一不法親王也。武ゝ崇敬他ゝ
事ゝ

一毘沙門堂　清花門院也。東麓山
に在り。宰相中将忠親卿の建立
なり。流れより西れの流もうべしな
ハ大伽藍なり

一醍醐院　宮門跡と三井寺の
長吏とうりくわたくしなり。
伝教院の頭なるゆへ熊野
三山の検校職をわたくしす。三井
ちよ院跡をはらひ新らたに綱所
法住寺殿二年五月。三井寺の
初なる熊野

三山検校よ被補。是より院跡
をはらひと雖ども。法親王
乃先達ハ源空聖人
建長七年三月三山検校覚仏法
親王仏洞熊野へ参詣
ハ是と初なり。尤衆徒ハ入
宮ゑうく一代一度ハ入家有
一寛朔院　宮方門跡三井寺の
吏とうりくわたくしなり。右寛朔院
満院専門主院検校の検校
ハ一代ハもうこと

一圓満院　法の実の流門跡なり。
大三ケ寺の三ケ寺の門跡なり。
也実とうつるく物なり
一一乗院　古は実門法也　今代は
実門法也
一大乗院　古は実門法也　今代は法
門法也。大三ケ寺に興福寺に門
法也。法相宗と号し。法家也
乃寺なり
一知恩院　宮門法也
一本願寺　西と号し表と云法

東院大永元年三月より顕如上
人ハ法門法と物許ありと云
伝へ云ふ。南は、武家乃崇敬
格別に仏見法と云ふ。東
と裏と云。法の西は彩色同
断なり
一興正寺　西は彩色に属ず。色
も法相宗流古学に門法の号
と勅許ありと伝へ云ふ。実は
正信正法と伝へ
一佛光寺　色も真宗一流の外

寺なるゆへ世俗より見も門法
准じるよう門法の号はあ
一 専修寺 [参州一身田] 見も三宗一流名田
宗門なれども門徒衆は門法り
准じるやうに法あり三流
又四記あり やいまごろんど
一 天台真言乃あ宗は聖道門と
云ふ宗門なる古義乃あ
流あり 古義は法流 新義
は根本は覚鑁法也 根本は
義真伝 破邪は知恵流

和州長谷乃小池山三寺新義の
内寺ごとの知恵流小池法はいし
僧侶より住ど金剛峯寺は貫と
ば検校ともぶ下ざとは叡ぶ
和真言乃寺くも多くは法
ゆくく叡ぶる
一 尼寺 上所

一 誠恐敬白　二 恐惶謹首 恐惶謹言
三 謹首 謹言　四 ひしふ悉 ひく
宛所　院号　寺号　某僧正御房
脇付 [御地中 [同病中 [同病中 [御侍中 [御侍中

三 半斗下　四 五斗下　六 斗下　れ下

僧同宿中ハ家々中ニ准ス。
僧同宿中ハ家々中ニ准ス。僧
坊中ハ四宿所ニ准ス。僧正
一僧四僧中ハ三々四中ニ
准ス

一或院ニ曰ク碩学制　大僧正准ス
大納言　正僧正准ス中納言　権僧正
准ス参議　法中准ス　法眼准ス
僧　法橋准ス五位法師　九僧准ス
平寺

天台
一若王寺　多賀不動院　右二ケ寺。大
僧正ニ仕ルもの。ゆるす寺ニ
聖護院　聖護院ノ家ノ家ナリ
六角堂
一勝仏院　兄弟聖護院ノ流
家ナリ。大僧正ニハ仕ザル
一猫家　二階堂行二ノ流ニ猫
のはゝ衣乃ハ老ハ准ス尋常ノ猫
家ハ三官ナリ。九位ノ者ハ
一切ハ出家ハ准ス禁中ニ場食ス
町平折敷也
一猫家ハ上所

一 恐惶敬白
恐惶謹言

三 ちゝ殿前
前流と

二 恐惶謹言
恐惶謹言

宛所一 拝上 寺号
拝上 ねを略号
拝上 乃号 知高

二 某寺
某院

侍所 侍所殿下
侍者殿御
侍者中

脇付

二 殿下
玉殿下

三 殿下
ルト
ヌト

蒲園下

返札 当番
当番 二 某殿 三 回番
当御 某回 御殿

右流家何も方同名也 但当
番者ちと。私也 番ちと。殿

乃字とけろ。侍所ありやきり
けりの号殿の字拝の字より。
殿のちと。なれの字より入ば
よろしうべし

一 侍従 ちと。 故条融流康暦
元年 妙範国師南禅寺住持く
叫。鹿苑院殿より初て殿号
侍従 ちと。初也。 故後花園院
文安三年七月相国寺也。花園風
号瑞溪 康正流より住持して為
侍従 ちと。妙範国師 故八歴義

る仏法を去て後住侍流落形
をを副らして五山十刹こゝ
今所次。武家より帖を給わる。
山は五山十刹ハ方丈ゝ
をうく。今ハ
又相国寺へ移ったをもて
て禅ちゐ後して金地院侍流
目すく五山出世ゝ
一五山出世ゝ沢
東寮西堂とのがゝ。
わゝをうく。勅許西堂乃ゝ

老ゝ。已勅住ゝ
一東堂ハ勅許也　編旨ゝ宛ハ
号ゝ和尚禅室ゝ後書生
ゝ和尚ゝ。
官ゝ伝也。中ゝ也ハ方丈乃
所望ゝ和尚号ゝ出ゝ衣ゝ
勅許あり。禅ちハ濃紫衣
ハ渋紫ゝ。西ゝ
也ゝ。五山ゝ
を吟味ゝ。僧録司禅ちの金
北院ゝ断ゝ。金地院ゝ

よ言上し。こゝを上てそい五方
叢より。概奏あるゆへ高野も五
山中小坐衣ぬれも老十人よ不滅
一 珍寶山大慈寺 甫山宗峯遺
大慈國師一大慈國師弟子也 後
醍醐帝之御菩提寺と佐よ出来也
とゝ
一 正法山妙心寺 甫山開山惠玄禪師。
花園院之御菩提寺也
右二寺 そもゝ之御菩提寺と。出
世ゝ次第ハ書記義主首座等

寮とのゝ方也。山あちこちよハ名堂多
し。名ゝ寮とゝ一宗ゝゝ正衣
乃ち老ゝゝゝ山ゝて住する坊
そもそぞハ勅任
右ゝ寺ゝと濟家と称ゝるハ。
臨濟之流ゝゝゆへ
一 仏光之弘嶽山也。智前
玄祥山永平寺と同准ゝゝ
曹洞宗ゝゝ寺也。洞家
ハ曹洞と唱ゝゝ初也。江湖
勅ゝ。ゝ一宗ゝゝこれ正衣
乃ち老ゝゝ。ゝゝ

ゑ法と考へ、なを寺れ永平寺
と称す。洋帝と云。京都にて本下
たる奉と有浦にて伝奏勅
作ちなへ　編旨と頂
戴す。紫衣と云勅免ゆる。出
色の色色と号す。あたれる元伝
物い紫衣とする
一浄土宗　浜西西山二流あり。法
然い法然上人の弟子聖光上人。
統ける者寺門門山ゆく
坂洛湯より流ざ流わよる

加法和流伝と云。西山流伝と云
いも法然上人の弟子隆寛上人
三鈷寺より伝る。京にて西山上立
ゆへ西山流伝と云。法和流の本
寺ハ知恩院名号金戒光明
百万遍知恩寺浄華院光明
四ケ乃寺と云今号寺
ハ属知恩院なり寺。伝ち職い
紫衣と云。西山流なり寺。
三法ち遣迎院也。光明伝ち
紫衣と云。惣上寺法和流な

ろゆへ法相源乃浄土宗ハ又
武之号級他ゝ異なり。彼宗ハ
京上なるゆへ知恩院と浄土宗
の惣本寺ゝ法相。若衆と老
ハ素門寺。僧位ハ比丘バ法橋
准僧位ニ成ハ地下乃法橋
ゝ准ずと

一脇付　侍者中　内宿中　二　坊者中　当座下
三　玉座下　座下　乃下
逸札　尊答　当社
三　法雄　四答　二　尖答　尖社

真寺　侍者御中　法座下　法座下
一真宗　親鸞号より十一代顕如上
人之代より門跡号あり　勅許
あり分れたる乃ゝ枝より分れ
引寺ゝ乃由緒あるゝ宗家と
云。古来定ゝ宗家七ケ寺
いり。多くハ法中すくなし。
生宗ゝくハ私ゝ位と立オ
一と宗家と号ゝ次ゝ門陣乃
ゝ家共ゝ号ゝ一家ゝ云。宗
脇号の一家ゝ云。是ハ門跡

一家の号あるかゆゑに宗と
くるる之。浄土宗よりせば法家
ハ袈裟乃も老一家い苟衣れ也
老は等しかるべきなり。行れも
色衣と宣べし。衣袈裟
とも云 衣擔代 色も色袈裟と称
兎浄土宗乃和堂よ准すべきなり。
ちなみ上ハ平僧之門弟
法官行りか間と云法衣と進む。
行事も 勅住の法衣ハ乃門
之新官の法衣ハ不浄法衣

不混行之中門弟乃法官も皆
勅住ゆゑ行り上所法衣を迎れ
行も浄土宗同住。但侍者ハ
中えりハ袈裟浄土宗よ限
りなきバ丁寧なり。されハ同住
一門宗 流名しかるに宗乃名称
ゆゑ鬼山鬼山双林寺ハ禁寺
也新堂し新法湯よ多く有り。
遊行ハ門跡七命を迎ル出家し一
通と人と云 故ゆ多院建法
中より法必と称乃し法を弘む。

お寺相州藤沢清浄光寺と号
さる上人と代々伝授と云事
職之上人は法華と浄土と兼
ハ藤沢より伝ル

一日蓮宗　お寺と称するもの法
華より多し。甲州身延山久遠
寺とれおのもうよ法華もさ
まざまの宗旨の行法ありそ
の行法は程伝ふまぐ相すること
おのの行法よりハ法華宗法
ハ藤沢の上人と同法なり。

日蓮宗出家衣　勅許法衣。日
蓮宗編号の沙門法華宗
古黄衣とそしり今墨色
袈裟おのおの中ごろ宗門
ごとの沙弟浄土宗ハ法
ものの別正しくもちいる
物許也

一律宗　聖武之時唐之鑑真
和尚来朝初めて律を授　順徳
院建暦元年俊芿法師宋ヶ
ゆく泉涌寺と開ク律と中

粤ヒ。金剛頂寺今ハ宗教院
と云伝ヘハ
弘法。戒和尚多ク
ヲ
ハ上ニ和泉国
宗ヨリ金剛
ハ金剛寺知ル事ト可ヒ
ヒ。
一山伏修験ハ
ちかり。ヲ山ハ天ヲ
殿ハ下ニ。南ハ三宝院
清瀧日ヲ
ケ。ハ熊野三山ヲ
ハ入ル。

右ハ院の下ヲ
ヨリ也
一ヲ石山社僧五坊ヨリ大学院
上ノ坊 威徳院 西坊 正持院 長谷坊
福寿院 下ノ坊 教学院 尾崎坊 五
坊共ニ法ヲ為極位ト仏法修験。
総ハ市内宿中 玉屋下リト
宛ハ大学院 又ハ西坊。
人ハ位ヨリ
一書写山ト園教寺ニ。僧の
一老ヒ者ヒ吏ヒ称ヒ

十二 工巧

一油紙(アブラカミ)は雲不材(ウンフザイ)と。紙と混(マゼ)め
巾(ハバ)らく。又弾(タマ)まく油と付(ツケ)く
丁(キ)也

一紙(カミ)は雲(ウン)らく雲不材と。白水
と入くすべし

一反紙(ヒキカミ)ちく泥絵(デイエ)の上は雲不
材と糯米(モチゴメ)の粉と入てすべ
一割れ板(ヤイタ)のすは竪(タテ)一尺二寸或(ハ)
一尺四寸或一尺七寸横(ヨコ)二尺八
寸或三尺六寸又(カキ)もの多(オホ)の

割れ乃言へば地より一間(ケン)一尺(シャク)。
法(ホウ)人(ヒト)のくらざるやうよ立
べし。割れと出(カ)とこゝろべ〳〵どと
のふとこゝろ也

一反紙乃すは大反紙ハ竪(タテ)六寸
四分(ブ)横(ヨコ)五寸六分小色紙ハ竪(タテ)
六寸。横(ヨコ)三寸三分 三光沙反の
一短冊(タンザク)のすは 右(ウ)ち也
流(ナガ)くなかし。色(ケシ)色(ケシ)紙(カミ)。竪(タテ)一尺
二寸横(ヨコ)一寸八分也

一筆(フデ)は油(ユウ)のもさ。真(シン)の筆ハ四寸二

分。行(ギヤウ)の長サハ八分。草(サウ)ノ長サハ五
寸二分。毛書(ケイ)ノ長サハ五寸。筆ノ数
ハ又寸法ニ有ベシ
一硯(スヅリ)かくしの。墨とすりても拭(ヌグ)
ぞうるこハ鳴(ナル)滝(キヲ)低(ヒク)く。硯(スヅリ)の面(オモテ)
とゝぐべし。一年経ハよく墨紙
おろし。こまねゝとぐべし
一茶(チヤ)とすりく板(トコロ)。毫(ヒ)の干(ヒ)ら
と云ハぐくをぐりくすれば。茶(チヤ)
よくとろるものなり
書礼口訣下

食茶書之三礼人生日
用不可須臾離者也然知
甚要者莫尤九章子夏
之撰甚綱領著三礼口訣
玉編案切需之不輟幸得
許可乞因壽梓以傳益
窮云
元禄己卯秋七月
書林柳枝軒
茨城方道謹識

少春堂
玉泉文庫